

コミュニティ

The Community

12

レクリエーションとスポーツ

1967

財団法人 地域社会研究所

コミュニティ

The Community

12

レクリエーションとスポーツ

財団法人 地域社会研究所

1967

発刊のことば

(創刊号から)

人間は、ひとりでは生きてゆかれない。つねに多数の他人とともに、助けあって生きてゆく。その生活、職業、学問、趣味などにおいて、なにごとによらず志を同じくする人間の集団はこれをコミュニティと呼ぶ。人間は今日まで、あらゆる工夫を凝らして、いろいろな形のコミュニティをつくって、その中に生きてきた。これからさきも、人間のあるかぎりその努力はつづけられるであろう。

日本人もまた、古来いろいろなタイプの集団生活を経験してきた。しかし、その大部分は、封建的な社会制度を土台としたコミュニティであって、個々の自由な人間を平等に扱ったものではなかった。さいきん新しい日本になって、初めて民主的なコミュニティを形成すべき責任を負ったわけであるが、まだ、旧来の慣習と惰性にも力強いものが残っているし、新しい観念の理解もいまだしの感が強い。

そのために、形のうえにおいて民主的社会となったわが国も、その実においては、いまだ空虚な状態であるといわざるをえない。いかにして良い民主的なコミュニティをつくるかということこそ、今日、日本人が直面している緊急課題である。

財団法人地域社会研究所は、この問題と取り組む目的で創立されたのであるが、国民全般にコミュニティの観念とその意欲がはなはだ薄いことが、もっとも基本的な問題であることに着目して、まず活動の第一歩として、きわめて平易で通俗的な叢書の刊行を計画した次第である。

叢書の名称を「コミュニティ」と定め、今後、各分野にわたる基礎的な知識の普及を目指して、つぎつぎとこれを取り上げて刊行をつづける予定であるが、われわれの念願のごとく、この叢書が広く国民の間に多少なりともコミュニティの概念を植えつけてゆくことに役だつならば、誠に本懐の至りである。

昭和39年(1964)春

財団法人 地域社会研究所

理事長 矢野 一郎

春の陽ざしを浴びて、休日を
愉しむある家族。

アサヒカメラ提供 水野千香氏撮影



魚

魚池





遊び場のない大都市での知恵。
横丁を区切った遊び場でも、
子供たちには天国となる。

アサヒグラフ提供

海はどこだ!!

レクリエーションもスポーツも

どこかへ行ってしまった。

朝日新聞社提供



目 次

第1部 報 告……………前川 峯雄

コミュニティ・レクリエーション

- I 余暇意識のうつりかわり…………… 8
- II 年齢別にみた勤労者の余暇意識……………13
- III レクリエーションの諸条件……………16
- IV コミュニティ・レクリエーション……………27

第2部 〈座談会〉

レクリエーションとスポーツ

- I 報告の要約……………46
- II レクリエーションとスポーツのあり方……………54
- III どのように指導するか……………71
- IV レクリエーションの場と施設……………83
- V いいコミュニティをつくるために……………97

コミュニティ・レクリエーション

前川 峯 雄

I 余暇意識のうつりかわり

近年、日本経済の高度成長と平行して、パカンスとか
レジャー時代 レジャーという言葉が、むやみにつかわれるようになった。これは、マスコミによる商業主義的な意図が、つよく働いたためでもあるが、とにかく世をあげてレジャーでもちきり、レジャーブームを巻きおこしたことは、確かである。

レクリエーションとか、そのためのスポーツなどは、このレジャーとは無関係ではありえないが、そのまえに、一度、昔から今日にいたる余暇の見方や余暇意識のうつりかわりを、ふりかえてみたい。

一般的にいて、昔は労働ということをし、とくに重ん
昔の人とひま じていた。病気でもない限り、働きつづけることが、人間の美德の一つとされていた。「ひまがあったら働け」というのである。このような生活観のもとにあっては、ひまを作って、何ごとかしようとするのは、罪悪のようにみられた。「怠けものの節句働き」という言葉がある。節句は、それコミュニティの公然と休める日であった。ふだん働かないものは、それ故に、公の休み日を使って働くのだというさげすみの言葉であった。

大正のおわりから昭和のはじめにかけて、一時、青年のスポーツが、盛んになったとき、「うちの息子は、働きもしないで、あんなことをして遊んでいる」と叱りつけたのを聞いたものである。この場合の「遊び」は今日の言葉でいえば、余暇活動に当っており、したがって、仕事から離れた余暇を、好ましくない遊びとみたのである。とにかく昔は、働け！ 働け！ であって、ひまを作らないことが、人間として尊いことであったのである。

こんな考え方は、第二次世界戦争のころいっそう強くなった。戦争のための産業がいちじるしく発展し、いくら働いても、軍需物資の生産要求にこたえることは困難であった。そこで国民は、1週間を「月月火水木金金」といいなおして、休み日なしに、働きつづけるように仕向けられた。にもかかわらず、生産は上がらないばかりか、却って減退していくことを心配して、権田保之助氏の如きは、生産を上げるためには、国民によい娯楽を与えて、心身を適度に休めて、働くようにしなければならないと、当時の軍部の方針に反対して、ひまの大切さを強調しているのであるが、全体としては、権田氏のような認識をもつものは、極めて少なかったので、一般的には働け働け主義であった。

レクリエーションの すすめ

戦争がすんで、国土はあれ果て、食糧にこと欠く時代を迎えた。平和に立ちもどって、人々は食べものも着るものも、住居すらなくなっても、戦いで生命を失うという心配がなくて、生きることができるのだ、という安心感をもつことができるようになった。この時、国民のみんなが、明るく生きていくために、スポーツをしようということになり、国民全体のスポーツを発展させようとして、国民体育大会が誕生したのである。

そのころ、戦争下に押えつけられていた表現意欲を爆発させるために、素人芝居やフォークダンスに熱をあげたことは、周知のとおりであるが、このような活動を、人々はレクリエーションとよんだ。暗い社会を明るくし、楽しさやよろこびを求めるために、レクリエーションが大切なもの

であることを、少しずつではあるが考えるようになった。

山梨県の富士見村のように、村人がテニスををはじめるところもあらわれたし、また村々では、盆踊りや祭りが盛んに行なわれるようになった。若い男女が、占領軍から教わったフォークダンスをして、夢中になるようになった。

このようなことを通して、人々の間に、労働の大切であることと共に、レクリエーションの大切さが、意識されるようになった。そして、この意識がもとになって、余暇または余暇時間が問題になってきた。人として生れた以上、人生を楽しくすごしたいものである。にもかかわらず、われわれは、それを楽しくするための時間がないではないか。家庭の主婦は、とりわけ長時間労働になやまされて、レクリエーションのためのひまがない。主婦や、広く婦人に、もっと余暇を与えよというのが、そのころの婦人集合や主婦の集いで共通の問題になりはじめた。また、農家の若い人の中から、「百姓ばかり、朝から晩まで、土曜も日曜もなく、働らき続けなければならない道理はなかりう。百姓だって、適当に休みを取って、楽しい生活を求めてもよいのではないか」という声が現われてきた。

昭和30年前後から、日本の経済は、い
高度成長とレクリエーション わゆる高度成長段階に入っていく。国民所得には、もちろん格差があったが、それなりに高まっていった。収入の一部を教養・娯楽にふりむける余裕も、できはじめてきた。そのころから、労働節約のための耐久資材を買うことが、できるような段階になってきた。

この現象を、いちはやく察知した商業主義は、ドンドン労働節約のための資材の売り込みに、狂奔するようになった。電気器具の売り込みが、それである。やがて身近なところで、余暇をたのしむための、テレビの売り込みがはじまった。子どもも大人も、テレビにかじりつくようになったのはこの頃である。「生活を楽しくしよう」というのが、世間の合言葉のよ

うになった。

村や町では、バレーボールを取り入れて、楽しみながら、もっと村人の健康を高めようとするところが出てきた。町をあげて、運動会や駅伝競争に力を入れるところも出てくる。いわゆる、コミュニティ・スポーツのよさがわかるようになった。山村の水泳のできなかつたところでも、プールをつくる場所も出てきた。空地を利用して、子どもの遊び場や運動場をつくらうとする運動が、ポツポツ現われはじめた。

経済の自由化に対処して、企業等が設
技術革新とレクリエーション 備投資に邁進するようになり、いわゆる
技術革新の段階に、突入するようになった。生産は、これによって飛躍的に上昇してきた。しかも、あらゆる企業が競って設備投資を行なったために、過当競争が随所にみられるようなこともあった。

このようななかで、大企業では、労働時間の短縮をうち出し、週5日の労働制にふみきるところがでてきた。そこで、二つの問題が起った。その一つは、技術革新に伴う「人間疎外」についての問題であり、他の一つは、週5日制の労働によって起る、毎週「連休」に対する余暇の、もてあましの問題である。余暇が、分別のない使われ方をするために、一方では、労働能率に対するはねかえりが現われ、他方では、無分別な余暇の過ごし方が、間接的には非行へと導びき、あるいは連鎖反应的に、人間破壊に導くという心配が起ってきた。

かくて、技術革新に対応するためのレクリエーションが、本格的に問題になってきたのである。要するに、レジャーが、人々によってどのように使われるか、もし、それが個人を墮落にみちびき、社会秩序を破壊するようなことになるのであれば、これは余暇の乱用または悪用であって、このままにして置くことはできない。その使い方を、真剣に考えなければならぬとする意見が、国民の中から出るようになった。

ここにおいて、余暇はあくまで個人や社会の形成のために、使われるべきであるとする思想が台頭してきた。そして、まさしくこのような意識のもとで、余暇や余暇活動を考え、それに取り組もうとする態度が強くなってきていると言ってもよからう。

II 年齢別にみた勤労者の余暇意識

以上、極めて概略的に余暇意識のうつりかわり年齢によってちがうをみたのであるが、それらは、その時代々々を生きぬいてきた人々の余暇意識となつて、ある程度のちがいをみせている。

次の表はそれを示す一例である。

年 齢 段 階	人 員	1	2	3	4
		働くことを 第一義とする もの	労働と余暇の けじめをつけて両者 を両立させようとする	労働を余暇 活動の手段 とみる	そ の 他 (含 不 明)
50才以上	42人	26%	60%	5%	10%
49~40才	187	21	61	3	15
39~30才	197	15	72	2	12
29~25才	225	13	72	4	11
24~20才	406	6	78	6	9
19~15才	146	2	78	5	16
平 均		11.6	72.6	4.2	11.6

これによると、働くことを第一義的にみようとするものは、高年齢になるほど多く、反対に、若いものになるに従って少なくなっている。

しかし、いずれの年齢段階においても、「きめられた時間はきちんと働くが、仕事がすんだら、仕事のことなど忘れてしまってレジャーを楽しみたい」とするものが圧倒的に多い。

しかもその割合は、年が若くなるほど多くなっており、50才以上のものでは60%であったのが、24才以下では78%になっている。

けれども、「自分がいちばんしたいのは、楽しい余暇活動である。働くのは、それに必要な金を、もうけるためである」とするように、労働をもって、余暇活動の手段とするものは、いずれの年齢においても極めて少ない。

要するに、今日働いているもので、労働オンリーに生きるというもの、労働第一の時代を生きぬいてきたものに、やや高くあらわれており、反対に、労働とならんで余暇活動の意義を認め、それぞれ性格のちがった意味をもつ時間とみるものが大多数であり、しかも、若年のものにその割合が多くなる傾向を示していることがわかる。

もしこれが、今の時代の人々の傾向であるとすれば、土曜日の夕方などに、若いものが登山・ハイキング・キャンプのために東京をはなれて、でいこうとして、多数のものが汽車を待っていること、夏の日曜日などに、江の島や鎌倉の海岸に百数十万のものが、でかけるのも当然であるといえよう。かれらは、働いたらあとは、生活を楽しむことに夢中になっているからである。

レクリエーションの意義を 再検討しよう

このように、働いているものの大部分が労働のあとでは、余暇に楽しみを求めて、何かの余暇活動をしたいと考えているのであるが、レクリエーションの本来の意味は“Wise use or good using of leisure time”（ひまな時間を賢明に上手に利用すること）とよばれるように、余暇活動の道程において、またはその結果が、人生として、あるいは個人にとっても社会にとっても、Wise use, good using と呼ばれるもので

なければならない。

だれでも、余暇を楽しみたいという欲求をもっている。しかし、余暇の使い方がまずくて、その結果、健康を損ねたり、安全を怠って死傷したり、他人に迷惑をかけたり、高山植物を根こそぎ取ったり、非行に陥ったのでは、レクリエーションとはいえないばかりか、“反レクリエーション的”であるといわなければならない。

とにかく、レジャー時代とよび、レジャーブームだとさげばれているとき、ただその言葉によいつぶされることなく、いま一度、レクリエーションの本来の意味を考えて、余暇を利用するように考えなければならないのではあるまいか。

Ⅲ レクリエーションの諸条件

われわれが毎日々々を生活している時間を、何にふ生活時間りあてるかによって、生活時間の構造がちがってくる。

一般に、われわれは、(1)働いたり、仕事をしたりすること、(2)食事をしたり、身仕度をしたりすることから、身の整理をしたり、趣味や教養をみたり、社交や奉仕をしたりなどすること、(3)一変して、床につき、ぐっすり眠ることなどをして、1日24時間を過ごしているのであるが、この場合、(1)を労働（または仕事）とよび、(3)を睡眠とよび、その残りの時間を、(2)余暇とよんでいる。

この場合、余暇は労働と睡眠に使われた時間以外の時間であって、この中にも、食事のように生存上欠くことのできないものと、自分の意志で、どのようにでも使いうる時間とがある。

そして、後者の場合を自由時間（Freizeit）とよぶことができる。レクリエーションは、この自由時間の長短によって規定されるのであるが、それはまた、労働や睡眠とも関係をもつ。

一般的にいて、われわれの生活は労働を中心とし生活のリズムで、生活のリズムが作られている。すなわち、労働の時間（通勤の時間も含む）が伸びるにしたがって、それ以外の時間は、一定の法則にしたがって変化する。まず、労働時間が伸びてくると、娯楽・運動・教養・交際のような社会的、文化的生活の時間や家事などの時間が縮められる。これについて、食事・身仕度・入浴など

の生理的生活の時間が制限されるようになる。

さらに、労働の時間が12.5時間を越えると、睡眠は標準の時間を確保することができなくなり、これが15.5時間をこえると、睡眠時間は急速に短縮されてくるといふ。(山崎進篇、レジャー時代)

上述の社会的文化的時間や家事の時間は、上にあげた余暇時間のことであるから、長時間労働は、まず余暇時間の減少を招くことになるし、最後には、生存のための必要な時間としての生理的時間や睡眠時間をも、けずることになる。要するに、仕事に忙しくなると、娯楽や文化活動はもちろんできなくなり、やがては食事などの時間までけずり、睡眠不足を続けなければならないことになる。

そして、このような状態が永くつづけば、人間は防衛体力はもちろん、行動的体力がおとろえ、やがて健康を損い、ついには取り返しのつかないことになる。

もちろん、一時的なアンバランスは、やがて回復するのであるが、もし長時間労働がつづく、通常の生活のバランスやリズムは破られてくる。

通常の生活のバランスは、単に生理的生存をつづけていくというだけでなく、社会的・文化的な生活をも、確保することを意味するのであって、もし長時間労働がつづけばつづくほど、社会的・文化的活動、すなわち余暇活動のための時間は、少なくならざるをえない。したがって、レクリエーションの可能性は、次第に失われてくるといふことになるのである。

この意味では、「暇があったら働け！」ということは、ある意味では、全体としての人間性の破壊に導くといってもよいのである。

もともと、暇があったら働け！という思想は、二つの立場から出てきているように思われる。その一つは、生産至上主義の立場であって、しばしば使用者の側にこの例をみた。いま一つは、働かなければ、家族を養っていくことができないという経済的理由である。超過勤務を要求してまで労働時間を増し、収入を多くしようとする場合が、その例である。

このいずれの場合も、人間を破壊に導くことになり易いので、労働組合は、これを抑制しようとした。事実、労働時間の短縮は、労働者ならびに労働組合側の要求から出たものであった。

しかし、今日の労働時間の短縮は、単に、人間の生理的生存への顧慮ではなくして、すべてのものが、労働とならんで、余暇の面での幸福を求めているといわなければならない。したがって、労働時間の短縮は、余暇活動やレクリエーションの可能性の拡大という意味を、多分にもっているということができよう。

このことは、家庭の主婦の場合についてもあてはまる。

家庭の中で一番早く起き、炊事・洗濯・掃除・育児と働きつづけて、最後に入浴して床につく主婦は、毎日々々、長時間労働に堪えてきたのであるが、それ故に、教養の時間も趣味の時間もなければ、ましてエネルギーを消費するスポーツなどを楽しむ余力は、存しないのである。したがって、レクリエーションよりも、まずいかにして余暇を生みだすかが問題であったのである。

同じように、これまで中小企業で働く人たちにも、余暇は少なかった。ことに、商店や家内工業の働き手は、長時間労働をつづけているので、ここでもレクリエーションは問題にのぼらなかつた。時間的に可能性がなかつたからである。

それがやがて、レジャーブームの波にのるようになったのは、技術革新下における、大企業労働者の労働時間の短縮などに影響されて、中小企業の求人難対策としての労働条件改善の一つとして、労働時間の短縮や定期休業日の設定などがあってからである。また、家庭における労働節約のための電気器具の使用、その他家庭生活の合理化などのためである。

かくて、多くの人々は、漸く週末の旅行や野外活動の計画・家庭における家族そろってのだんらん・趣味・教養の追求を考えることができるようになった。また、テレビの前で身体をやすめ、心を楽しませることもでき

るようになったのである。

要するに、長時間労働をしているときに、せいぜい、ごろ寝などの休養に、余暇時間を費そうとするのであって、人間として要求されるレクリエーションは制限される。これに反し、自分の自由に使うことができる時間が、増してきたとき、はじめてレクリエーションを考えることが可能になる。どうして自分の時間を、自分で満足できるように過ごすかということが、問題になってくるのである。

余暇時間のうちには、すでにみたように、生理的生活時間や家事などで、拘束性のつよいものもあるが、
自由時間 なおこれ以外には、ある程度、自分の都合や意志によって、自由にすることのできる時間がある。この時間を、厳密には自由時間 (Freizeit) とよんでいる。いわゆる余暇活動は、この時間において行なわれるものであり、したがって、レクリエーションも、この時間内においてみられるものである。

このような自由時間は、人々の生活時間構造によってちがう。また、地域や職業によってもちがう。たとえば農村などでは、長時間労働を余儀なくされるどころの農繁期と、労働にゆとりのある農閑期があって、自由時間の方も、いちじるしくちがっている。

前者では、生理的生活時間や睡眠時間までも制限をうけるので、ほとんど余暇活動やレクリエーションのための時間を、とることが不可能に近い。しかしこれがすぎると、かなり自由な時間をとることができるので、余暇活動やレクリエーションは可能となる。むしろ、農繁期に抑制されていたところの余暇活動の欲求をみたし、これを、レクリエーションに方向づけることが、大切であるともいえるのである。

自分で自由にすることのできる時間を、規則的にもつことのできるものは、いうまでもなく、季節に左右されない労働者であって、いわゆる、会社や役所のようなところに勤務する労働者である。かれらには、週日と週

末・日曜日というように、仕事の時間がきちんと決められ、したがって、余暇を定常的にとることができるのである。

この場合、余暇活動やレクリエーションの観点からすれば、週日・休日・休暇はいちじるしくちがった性格のものとなる。

たとえば、週日の場合では一般に、自由時間そのものも短かく、かつ翌日の労働を考えなければならないので、余暇活動をする時間も短かく、また余りはげしい活動をして、翌日の労働にさしつかえるようなことを避けようとする。むしろ、労働で疲れた身心を、安めることに重点をおく。したがって、余暇活動も比較的、静的なものになる傾向がある。

これに対し土曜日は、翌日は休みであるというので、一番安らいだ気持ちで余暇をすごす。しかし、1週間の疲れが重なっているので、解放感の割合に、動的な余暇のすごし方は少ない。

自由時間を長くとることができる日は、何といても日曜日である。キリスト教国では、この日曜日を「安息日」と称して、なるたけ心静かに過ごす慣習になっているが、わが国では、まとまった余暇活動に過ごす傾向が強い。キャンプ活動をしたり、海水浴に出かけたり、訪問をしたりする時間に使われている。また男性では、週日には、できないような日曜大工をしたりするものが多い。日曜大工でなくても、家の整理などの家事的な用務に使われる。いずれにしても、土曜から日曜日にかけては、緊張から解きほぐされた感じをもって、まとまった余暇活動をすることができる。

このように人は、月曜日から始められた労働をつづけ、週末にいたって、労働に対する緊張を解きほぐして、十分な休養をとり、次の週の労働にそなえている。

かくてわれわれは、6日の労働のあとに、日曜日の大休養をもつという、生活のリズムを繰り返しているのである。余暇活動やレクリエーションは、この生活のリズムに即し、それにマッチして行なわなければ、かえっ

て月曜日の「余暇活動づかれ」のような現象がでてくる。

また、働くものには一定の「有給休暇」がある。労働者の休暇のとり方を調べると、(1)小ささみに取っている。(2)その目的は多目的であること。(3)年齢によって、使用傾向にちがいがあることである。

私の調べによると30才以上のものは、家事・看病に2.5日、接待・訪問に1～1.6日、病気・静養に2.3～3日、旅行・運動に1～2日がその主なものである。これに対し、24才以下のものは、家事・看病・接待・訪問は極めて少なく、反対に旅行・運動に3.5日以上を使っている。30才以上のものは、家事や病気・静養に多く使っており、旅行や比較的長期間にわたって行なわれるような余暇活動に、余り使っていない。これに対し、若いものは開放的、積極的余暇活動に多くの日数をかけている。これは、年齢による欲求のちがいの他に、家庭内の位置や役割に関係をもっている。

なお、有給休暇をフルに使っていないものが、極めて多いということも、注目しなければならない。有給休暇をフルに使わないのは、病気したときや家事で、止むをえない場合があるかもしれない。もしそんなとき、これを使うつもりでいたのが、このような事情がなくなった、という用心深さがうかがえる。

さらに会社では、休暇をとることを心よく思わないというものも、若干はある。このようにしてみると、有給休暇の使い方としては、止むをえないものがあるが、それにしても、20日のうち1週間とか、10日とかまとめて心身の休養をし、若いものでは積極的に野外活動などにつかい、1年間の疲労をここで立て直して、翌年にそなえるような、長期的生活計画が少ないことは問題ではないだろうか。

それはそれとして、長期の有給休暇は日曜日のようなものもちがって、いっそう纏まった計画をもって、余暇活動のできる可能性をもつときであるとみることは大切であろう。

かくて週日・週末・日曜・祝祭日・休暇は、それぞれ性格のちがった自

由時間である。これをレクリエーションの立場から利用するということは、大切な点であるように思われる。

余暇活動には多くの場合、経費を伴うものであるから、経済水準の如何は、余暇活動やレクリエーションに関係するといえる。たとえば、農家の経済水準を上・中・下に分けてみると、低い階層よりも高い階層の方が、地域のレクリエーション活動に対して高い参加率を示している。また、スポーツの参加状態をみると、ほとんど大部分は、経済的に心配のない学生層によって占められている。さらに、国民体育大会の参加状態をみると、学生と大企業の選手である。大企業では、スポーツの練習、試合の出場の場合に、十分に経済的に補償されている。したがって経済的な条件は、余暇活動の参加を左右する有力な要因であるといえよう。

なお、レジャー産業の消長は、ある程度、国民の余暇活動の盛衰と関係しているといえる。

レジャー産業は、経済の高度成長を示すようになってから著しく発達している。したがってこの点から、国民の余暇活動が著しく促進されたといえる。

ことに、余暇活動が大衆化するためには、国民大衆の余暇消費能力が高まることを前提としている。

人間が、どんな環境下において、生活するかによって、都市化で、余暇活動の内容やレクリエーションについての必要性を異にすることはいうまでもない。今日の生活環境のうちで、とくに注目しなければならないのは、おそろしい勢いで都市化がすすみ、この都市の中で生活するものが70%近くなったということである。

ことに、人口が大都市に集中するようになれば、大都市特有の状況のもとで、新しい意味でのレクリエーションが必要になってくる。たとえば、

1千万以上の人口が、狭いところに集中するようになると、市民は自由に運動することもできない。「歩け歩け！」といわれてみても、こうも自動車がひんぱんに往き来しては、安心して歩くこともできない。さりとて自宅で運動するには、余りに庭が狭すぎる。

団地や公団住宅に住んでいるものは、狭い住居や隣り近所からの圧迫を、常に感ずるようになる。大都市の人が、何百万人と湘南海岸に出かけたなり、夏になると、驚くほど大勢のものがキャンプに出かけ、冬はスキーに苦労しながら出かけるのも、狭くて身動きならない、息づまるような、大都市の環境を抜けだして、自然の新鮮ないぶきに接する、自然的要求の発露とみることができよう。

技術革新が進展するにつれて、労働の様式が変わり、
技術革新下の労働 それがまた、新しい意味でのレクリエーションを、必要とするようになった。

技術革新にもなって重筋的労働が減少し、これにかわって、単純反復作業や監視業務が、とくに増してきた。単純反復作業では、身体の一部を、ベルトコンベヤーの速度にあわせて、時間いっぱい、作業をつづけなければならぬ。従業員はそれ故に、身体の機能が次第に低下する。

たとえば、入社時とくらべてみると、この作業に従事した年数を増すにしたがって、体力のおとろえが増してくる。またいつも、機械に追われて作業をしているものの中には、強い精神緊張を訴えるものが多くなる。監視業務の場合は、つよい責任を感じながら、監視をつづけなければならぬので、ここでも激しい精神緊張と神経疲労を訴えるようになる。

したがって、技術革新下の新しい労働様式に対しては、身心に及ぼす種類の障害を未然に防ぐために、精神的緊張を解消し、あるいは身体機能のおとろえを、補修するようなレクリエーションが必要になる。

また、新しい産業形態においては、全企業体が有機的・組織的に運営されるために、なめらかな人間関係を作らねばならない。この点で、相互に

理解しあい、協力関係をつくり出す意味での新しいレクリエーション活動が、必要となってくる。かくて、新しい労働様式や労働組織は、それに伴う人間疎外をおこすおそれが多分にあるので、これを回復する意味での、新しいレクリエーションを要求することになる。

人間が、労働時間を短かくしようと努力し、個人の**主体的条件** 所得を高めようとするのは、何のためであろうか。まさか、ごろ寝をするためでもあるまい。また、ただ蓄財するばかりではなかろう。そんなものとはちがって、何かそこに、生き甲斐を感ずるものがある、そのために時間を作り出し、経費を捻出しているのではないか。あるいは、労働だけでは得られないものが、労働の他にあるからである。

そして、この労働の他にあるものを、仮に余暇活動というならば、人は本来、余暇において楽しみを求めている、といわなければならない。このようなものを、余暇活動に対する欲求ということができよう。この欲求は、満たされない状況におかれるとき、いっそう強くなる。昔は、それをあきらめによって解消していた。たとえば、嫁はそのようなあきらめの訓練を、常にうけていた。貧乏人もそうであった。

ところが、今日では、人並みのことは、誰でも求める権利があると感じている。日本国憲法も、「最低限度の、健康にして文化的な生活」をもつ権利があるとしている。かくて、閑人や上流階級や支配階級のものに、限られた余暇活動への欲求は、大衆のものとなってきたのである。すべてのものは、どのような条件下にあっても、健康でありたいと思う。また、文化に接し、文化的な活動をしたいと思うようになって、当たり前なのである。

しかしながら、レクリエーションとしての意味を、もつような活動をしようとするれば、ただ個人の欲求を満たすというだけではできない。活動の選択ができ、それができるような態度や能力を、もっていなければならない。この態度や能力をもつことによって、レクリエーションとしての意

味を、現わしていくことができるのである。たとえば、ある程度まで音楽のことがわかれば、はじめて鑑賞ができる。またある程度、楽器を奏することができるようになるとき、さらにそれを進歩させようとする意欲を起し、それに伴って進歩のよろこびを、もつことができよう。文学作品に接し、文学を愛好するにも、それに必要な基礎的能力を、もっていなければならない。スポーツにしても、みんなと人並みに活動ができて、初めてスポーツに心を向けることができ、そうなれば熱心に練習し、やがて進歩もみられ、スポーツの面白味がわいてくる。運動能力の低劣なものは恥かしくて、みんなと一緒にできないし、自分にも、満足のいくところまではいかない。

レクリエーションの意味をもつように、余暇活動をするには、それぞれのものが、自ら愛着を感じ情熱をもやす分野や領域をもち、同時に、それに対する態度や能力をもっていることが、主要な条件となろう。この主体的な条件のことを忘れて、ただ奨励しても、徒勞に帰してしまうことになる。

余暇活動やレクリエーションのための活動は、一定

活動の場所 の場所で行なわれる。その場所を大別すると、(1)家庭、(2)公共施設、(3)商業施設、(4)海・山・原野のような自然環境がある。これらの場所は、余暇活動やレクリエーション活動を条件づける。たとえば、家庭においては、主として家族で楽しむこと、あるいは家の中で、できる範囲の活動に限られる。

余暇活動をする人々のために、営利を目的として作られた施設は、極めて多い。これらの商業施設は休養・休息の場所として、飲食の場所として、ショッピングの場所として、さらには映画・演劇をみせる場所として、あるいはさまざまな運動競技の場所として、その他各種の会合の場所として、人々が使用できるように用意されている。ここは、営利が目的であるから、人々は、多額の金を出さなければならないので、その面で制限

をうける。

金がないと、誰でも自由にこれらの施設を使って、余暇活動をするわけにはいかない。また、営業の主たる目的が、利益をうることにあるから、多くの場合、できる限り多数を、その顧客として呼びいれようとする。そのため、趣味や娯楽が、多くの人々の共通の欲求にかなうように経営されるので、内容が低俗化する可能性がある。レクリエーションの点からいえば、金がかかることと、内容の低俗化ということに、問題がある。したがって、商業施設がひどく繁栄することは、健全な余暇活動を願いとす点で、必ずしも適当でないと思われるようになる。ここでは「消費は美德なり」というような歌い文句で、人々の娯楽消費を強く刺激するので、生活の安定性が失われるものがでる。この欠点を補い、すべての人々に、健全で豊かな趣味や教養をすすめる目的をもって、公費をもってまかなわれる公共施設が必要になる。このような施設には、公民館・公会堂・子どもの遊び場・運動場・体育館・公園など、さらに図書館・博物館・音楽堂・美術館などがある。公費をもって維持、経営管理がなされ、無料か、有料の場合でも極めて安く、内容の健全性や安全性、さらには価値性をたもつことに、注意がはらわれている。しかし、商業施設ほどにサービスが行き届かなかつたり、官僚的であったりする心配もあるし、公費に限界があるので、あらゆる人々の余暇活動の欲求を満たすほどには、なかなかいかない。

とにかく、すべての人々が余暇活動を行ない、これによって満足や楽しみを味わうことができるようになるためには、それを行なうための適当な施設が十分にそなわっていなければならない。もしこれが不十分であり、不適當であれば、余暇活動は著しく制限され、あるいは、曲ったものになっていく可能性がある。

IV コミュニティ・レクリエーション

すでに前にもみたように、古
昔のコミュニティ・レクリエーション 時代には、一般的に遊びを否
定し、否定しないまでも、好ま
しくないものとみ、ときには罪惡視するような傾向があった。それにもか
かわらず、コミュニティはそれぞれ休日をもうけ、この日には公然と遊び
を許していたので、地域の行事が行なわれていた。その起りは、ほとんど
宗教的な行事と結びついていたのであるが、人間にとっては、それが楽し
みの日であったことは否めない。これは、いわゆる民間の年中行事であっ
た。

民間の年中行事の主なものには、正月・盆・節句のようなものから、神
社の祭礼、お寺の宗教的な催し、あるいは田植後の「さなぶり」、収穫の
祝などがあつた。これらは、大体定期休日にあつており、その日には
「もの日」として、その時々食べ物が作られ、仕事を休んで休養をと
り、あるいは着物を着飾って、神社や仏閣にもうで、さらにみんなで地方
の歌をうたい、それに合せて舞ったりした。ときには武道の試合、その他
綱引きや、たこあげのようなスポーツもしていた。また祝宴をほり、よろ
こびあつた。

これらはすべて、地域社会の共通の休み日に、すべての人々によって行
なわれたという点で、今日のコミュニティ・レクリエーションの概念に当
るものといえる。

当時の行事は非常に強く、地域社会からの拘束をうけていた。もしこれ

にそむくならば、「怠け者の節句働き」などといわれて、ひんしゆくを買ったのである。また、田植後のさなぶりや慈雨にめぐまれたときなどは、「追いあげ」といって部落のものに田畑で働かせないようにしたのも、この例である。

このように、古い時代といえども、人々は何かの日を設けて（地方によっては、こんな日が50日以上もあった。今日の日曜日の数に近い）、仕事から解放された、楽しみの時をもっている。この日は共通の休みの日であるから、誰にはばかることなく、休養や楽しみをもっている。住民はこの意味では、みんなと一緒の休み日を味わっていたのである。

このようなコミュニティの統一的な方式で、行な
近代的な余暇活動 われた年中行事がやぶれたのは、週制の採用と労働の多様性および余暇意識の確立などが大きな役割をなしている。農村でも戦後、週制をとり、日曜日を休みの日とし、これを余暇活動にあてようとするところがでてきた。

しかし、多くの農村では、季節により労働力の集中する農繁期と農閑期との区別があって、必ずしも昔の形態が完全にかわるというわけではない。ただ違うのは、農家でも、家族の全員が農業のみに従事する（専業農家）のでなく、勤め人をかかえる（兼業農家）ようになり、そのために、古い形の一村あげてコミュニティ・レクリエーションをもつことができなくなった。

まして、都市における地域住民の職業分布は、まったく多様であって、それぞれちがった生活のリズムと、ちがった生活形式との複合的な生活形式が、都市社会生活の実態である。したがってここでは、もはや地域社会の統一的な余暇生活様式は、やぶれてしまった。たとえば、お祭りや節句はあっても、それは地域に残存する年中行事の遺物にすぎないのであって、住民の生活のあり方を、規定するような力を失ってしまった。むしろ彼等は、それとはちがった職場のコントロールをうけて、自己の生活のリ

ズムをそれぞれ形成している。祭りがすたれたのはそのためであり、盆行事がなくなったのもそのためである。もし古い遺制があるとすれば、商人と子どもに見られる位ではなからうか。

また最近では、人々の余暇意識も極めて自由になってきた。かれらは、隣近所の人々に気を配ることなく、自由に休日を取り、余暇活動も、それぞれ自己の好みに応じて行なう。他人のことに気をくばらないということが、近代都会人の特性になっている。

かくて個人々々は、コミュニティの拘束をうけることが稀薄になって、むしろ、勤めている会社や同業組合からの規定を、強くうけるようになった。各企業体は、それぞれそこで働く従業員に対して、労働の時間・曜日・内容を規定する。これをうけて、労働者の職場外の生活が、間接的に拘束されるのである。またとくに、中小企業の場合、業種別に定休日をとるところが多くなった。床屋の月曜日、呉服屋の水曜日というように、定休日がきまると、その業種に属する従業員は、それぞれまとまって、余暇活動をするようになった。同業者組合員は、定休日に野球をしたり、海水浴にいったりなどする。大企業では、職場内でレクリエーションを推進するようになり、また同業組合では、業種別の組合的レクリエーションを企てるようになった。これは、地域組織の変革にもなう、レクリエーションの変革でもある。

新しいコミュニティ・レクリエーションの成立

このように、都市化の程度がすすみ、大都市集中の傾向が、強まれば強まるほど、コミュニティ意識は稀薄になってきたし、地域住民は、自分のことだけを考える傾向がつよくなったのであるが、これを当然のこととして、そのままにして置いてよいと言えるであろうか。自分の住んでいるコミュニティをさらに住みよくし、あるいはコミュニティ生活を豊かにし、楽しくするということを考えなくてよいであろうか。新しいコミュニティ・レクリエーションは、このような問題意識から出発

するのではないかと考える。

プレーグランド・ムーブメント
このような問題意識から出発して、コミュニティ生活を考えようとする動きが、子どもの遊び場を作ろうとする運動を中心に起っているように思う。

アメリカのレクリエーションは、子どもの遊び場を作ろうとする運動から出発したといわれる。それは、20世紀に入る直前のことであった。両親が子どもをおいて働きにでたとき、この子どもたちの生活の本拠ともいべきプレーグランドを作り、そこで、子どもらしい生活をさせようとする善意から起った運動が、やがてコミュニティ・レクリエーションに展開した過程を思い出す必要がある。

今日とくに都市の子どもは、極めて可愛想な環境のもとで、生活を余儀なくさせられている。子どもは、遊ぶことを通して、身体的にも精神的にも、また社会的にも成長する。今ほど都市の過密化のすすまなかつた時代には、どこかに広場があり、子どもはそこを見つけて遊びくらしていた。ところが今日では、そんな場所はほとんどなくなった。仕方なく子どもは、街頭にでて遊ぼうとするのであるが、そこには、子どもの生命をもぎとるようなものが、ひっきりなしに走りまわっている。毎日、そのためにひき殺され、傷を負わされている。もはや子どもにとって、安全な場所は見つからないほどに感ぜられたとき、漸くわが国でも、子どもの遊び場を作ろうとする運動が起ってきたのである。

こうして作られた遊び場で、子どもは、よろこんで自己の生活をくりひろげ、友人とともに遊んで、社会生活の基本の力をつくりあげている。しかし、その数は決して多くない。

子どもは年齢によって、1人で出かけていける行動半径は、ほぼきまっている。小学校入学以前では、せいぜい300m以内であるといわれている。この基準でみると、現在の子どもの遊び場の分布は、どうであろうか。

わが国では、子どもは親の子としてはみるが地域の子どもとしてみる

ことが、少なかったように思う。たとえば、いたずらをしている子どもをみつけても、「よその子ども」だから、あまりとがめもしない。これではコミュニティの子どもとはいえない。わが子であろうと、他人の子どもであろうと、地域社会の子どもとして、ひとしく面倒をみるというのが、近代社会のならわしではあるまいか。他人から、自分の子どもが叱られるのを、越権行為として、みていたのではよくない。とにかく、子どもを地域の子どものしてみるとき、かれらの生活の拠点ともいべきプレーグラウンドを、地域社会が責任をもってみてやろうというのが、コミュニティ・レクリエーションやコミュニティ・スポーツの立場である。

学童についてはどうであろうか。

今日の学童たちは、朝早く家を出て学校が終ると、学校から追いかえされるようにして（教師の勤務時間の都合）、うちに帰える。それから、塾に行ったり、自宅で勉強させられるものが多い。しかし、どこの子どもも遊びたいのであり、そのような本能や衝動をもっている。それが、こうも勉強ばかり強制されたのでは、自由に伸びることもできない。子どもに勉強させることも大切であるが、遊びにおいて、子どもは「困難に耐えることのできる体力を養ない、集団の中で社会道徳を守り、遊びの節度を自ら知る」ようになるのである。

しかしそれには、幼児の場合と同様に場所がない。われわれは、このことを学童の口からじかに、しばしば聞く。曰く、「学校で遊びたいと思っても、4時半をすぎると帰えらなければならない。さて、街で遊ぼうとしても、適当な遊び場がない。一体僕たちは、どこで遊ばばよいのでしょうか」と。

このような学童にも、遊び場を用意して、ほどよく遊ばせる必要がある。親はもちろん、地域の人々も、遊びは罪悪であるとする考えを改めなければならない。遊びが悪いのは「野放図で、人に迷惑をかけるからであって、友だち同志が楽しく遊ぶということは、勉強と全く同じに大切なこ

とである。」この認識に立って、地域の人々と話し合っ、地域の学童に、低劣でない遊びができるような場所を与え、それを奨励し、悪い遊びに走らせるような誘因を断ち切ることは、コミュニティ・レクリエーションの一つの任務であろう。

ある市の桜の名所のできごとである。桜のつ
学校に依存しすぎる ぼみが、大きくふくらむころ、見物人のために、

ガラス製のボンボリがつくられる。ある日のごと、地もとの中学生が、いたずらに石を投げてガラスをこわした。そこに居合わせた地域の人々は、かんかんにおこった。しかし、そこでその子どもを叱ろうとはしないで、丘の上にあるその子どもの在学している中学へ行って、かれの行状を話し、学校に善処方を要望した。

私はこれをきいて、日本の教育は学校と家庭にはあるが、地域にはないのだとしみじみ感じた。このように、地域社会で遊んでいる子どもを地域の人々が、たしなめてはならないとすれば、問題である。電車の中で、乗客が無頼漢から、ののしられたりなぐりつけられているのに、それを見ないふりして、誰れも止めようとならないのは、あとのことを恐れて、面倒なこと、くちばしを入れないのだという、自分本意の考えであって、これでは社会の秩序は守られない。

自分の子どもではなくても、地域で遊んでいる子どもには、地域のものが、地域社会を明るく、楽しくするという意味で、しつけ・教育をする責任があろう。地域の子どもに、運動場やプールを作ってやろうというコミュニティ・サービスは、これと同じ考えである。コミュニティ・レクリエーションは、このサービスに依存して展開するレクリエーションというべきであろう。

止めるだけではレクリエーションは育たない 余暇活動に対する志向性の強いのは、青年期までであって、結婚するとその傾向は変ってくる。地域社会では、このように余

暇活動を強く求めている青年たちに、どんなことをしているであろうか。かれらは、いろいろの趣味活動を求めている。音楽をしたいというもの、フォークダンスに興じたいとするもの、語学の勉強をしたいとするもの、あるいは、スポーツに情熱を傾けたいとするもの、さまざまである。地域社会では、これらが適切に満たされるように、なっているであろうか。

もし、そうでなければ、かれらはどこに行くであろうか。これらのレジャー階層を、待ちうけているのは、レジャー産業である。それが提供するものは、すべてが問題になるものとは限らない。その利用の仕方を誤らなければよいのであるが、必ずしも、そうではないものもある。その一例として、射倅娯楽の場合をあげてみよう。

昭和40年度射倅娯楽調べ (国民生活白書)

種 類	売 上 げ 金 額	入 場 者 数	開 催 日 数	売 上 げ の 前 年 度 比 率
	円	人	日	%
競 輪	212,482,439,000	27,772,240	3,744	116.9
オートレース	24,768,234,100	3,874,501	617	125.7
モーターボート	98,333,184,200	13,361,556	3,546	134.5
公 営 競 馬	109,285,837,600	11,396,164	2,119	119.2
中 央 競 馬	92,629,951,400	4,483,787	271	134.3
合 計	537,499,646,300	60,888,248		

これによると、約6,089万人を動員し、約5,375億にのぼる金額を、車券や馬券を買うために支払っている。全部が、支出というわけではないが、莫大な金が出るのである。ある県では、競輪のようなものは、望ましくないとして、全廃したほどであるから、推奨すべき活動とはいえないであろう。にもかかわらず、これだけ大勢のものが、夢中になるということは、問題であると言わなければならない。なお、これらの射倅娯楽のほか、パチンコやマージャンのようなものも、非常に普及している。

レクリエーションの観点からいって勿論、これらがすべて、いけないと言いきることはできない。問題は、こんな娯楽でなければ、他に何にもないのかどうかである。まずこれらは、興味づいてくると、他を犠牲にしてまで耽溺する傾向があり、その場合には、他の生活面へのはねかえり、それにとまらぬ反社会的行動が予想される。

つぎに、このような娯楽は、人間性の向上にとって、どれだけのプラス・マイナスがあるかということである。もし、人間性をマイナスにすることがあるとすれば、レクリエーションとはいえない。

しかし余暇活動は、本来、本人の自由意志によって行なわれることを、建前とするのであるから、たとえ、それがギャンブルであっても、その伸び工合が、どんなに多くなろうと、ほうっておけばよいのであると言えないこともない。けれども、ギャンブルの個人的・社会的はねかえりをみれば、黙って置くわけにはいかない。そこで、望ましくないと考えられるような余暇活動への志向を、他の何ものかで「置き換え」、それによって、住民をいっそう望ましい余暇活動へと方向づけることが、住民に対する地域社会の役割となるのではないかと思われる。

地域住民のための サービス

レクリエーションは、余暇活動に対する個人々々のうけとり方と関係する。それが人生にとって、意義ありと感ぜられるとき、あるいは、そのことをすることによって、生き甲斐をいっそう深く感じとったとき、そのような余暇活動は、レクリエーションといえることができよう。要するに、本当の意味で、レクリエーションであるか否かは、その本人が決めることである。

しかしそれだから、レクリエーションのことは、個人の自由に任せておけばよいことで、他からあれこれと言うべきでないということも、正しくはない。現に、スポーツを何よりも愛し、楽しんでいるものがあるが、他面、それを行なうための場所や仲間や指導者が、ないというものもある。

キャンプをしたいと思っても、商業キャンプでは金がかかって、手におえないというものもある。ことに1人だけではできない、たとえばコースのようなものは、同好の集団がなければ、どうもしようがない。そういうものが地域社会におれば、できるかぎり、それらの欲求を正しく満たすことができるように、配慮することが必要である。

ここで、いうところのコミュニティ・レクリエーションというのは、地域社会の住民のレクリエーション要求を、コミュニティの立場から組織し、それができるような条件を整えて、これを利用する場合のレクリエーションというようにとってよいのではないか。もっと判り易くいえば、地域社会のサービスを媒介として、行なわれる住民のレクリエーションというように考えてもよいのである。

このような、住民のレクリエーションに対するコミュニティ・サービスを大別すると、(1)エリア・サービス (Area Services) (2)プログラム・サービス (Program Services) (3)クラブ・サービス (Club Services) がある。

端的に言って、地域の住民が要求している活動を
エリア・サービス 正しく発展させることができるような「場所」をつくること、とくに、できる限り大ぜいのもの
要求を、みたすことのできる場所をつくることである。このようなサービスは、不完全ではあるが、現在も行なっている。たとえば、地域の公民館や公民館の分館・市民会館とか、公会堂などとよばれるものは、これまでも作られているし、現に作っているところもある。

戦後、国や地方公共団体では、熱心に公民館をつくった。どの市町村へ行っても、公民館のみられないところはない。そして、それなりに機能を果しているのである。国や地方公共団体では、これを社会教育のための機関としているが、利用者の立場からいえば、余暇をそこで有意義に過ごすとするのであるから、レクリエーションの場といえよう。

同じように、国や地方公共団体では、体育館・プール・競技場などの運

動施設を作っている。国立競技場・県営総合グラウンド・市民競技場というように、いろいろの段階の施設があるが、これはいずれも、地域住民のためのものであるといえる。

これに類するものとして、国立青年の家とか、県や市の青年の家などの施設もある。さらに、これに準ずるものとして、ユースホステル・国民休暇村などもある。これらはいずれも、青少年に健全な余暇活動を行なわせるための場を、提供する意図をもって作られたものである。エリア・サービスの問題は、これらの施設が、地域住民のどんな要求にこたえ、何のために、どんな人々によって使われるか。その目的にあっているかどうか、ということである。われわれの見限りでは、折角作られたものが、地域の多くの人々に使用されなかったり、少数のものに占有されたりすることが、ないでもない。これらの施設は、自分たちのものとして、つとめてよく利用することが、何よりも大切なことになろう。

また、これらの施設は、多面的に利用できるように作られていることが、大切である。そこでは、全地域の人々が、使用できるとともに、地域のさまざまな運動や文化のサークルなどが、利用できるように作られていることも、重要であろう。

この意味では、学校などの施設を、もっと利用するような工夫が必要である。学校の運動場その他を、地域に解放させよという声は、すでに久しい前から聞かれているが、それが今もって、本当に利用されないのは、どんな理由があるか。

たとえば地域住民が、学校などの公共施設の利用の点で、全然訓練されていないということもあるし、学校などの施設を、他の集団が利用する場合の管理の基準を、作っていないということもある。これらを、うまく解決しなければならないであろう。

しかしそれにしても、運動などの公共施設の数、余りにも少ないことに気がつくのは、私一人ではなかろう。野球をするにも、朝5時ごろから

行かなければ利用できないというのは、絶対数が足りないからである。今日、われわれがみる運動場は、高級のものが少しあって、大会用に使われるが、それは、スポーツ大衆のものには、なかなかかなりえないのである。スポーツ大衆には、近いところで、日常の練習や稽古のできる場を、必要としているのである。

体力づくりを考えても、1週3回以上行なうことが、大切だといわれているが、本気に、国民全体の体力づくりを、考えようというのであれば、それを実践できる程度に、多くの施設を必要とするのである。西ドイツの7500億円の「黄金計画」やイギリスの社会スポーツ計画などをみると、選手用とともに、大衆用のスポーツ施設にも、力を入れているようである。

また、同じくスポーツ施設といっても、住民のスポーツ要求は多様である。これに応じた施設は、決して単純なものであってはならない。体力や技能の程度もちがいが、やりたい種目がちがうのであるから、それらに、どのように応えるかが、重要なことになる。

地域の人々の幸福や楽しみになるような計画
プログラム・サービス を立て、それを地域の人々に提供するのが、プ
ログラム・サービスの役割である。

すでにみたように、旧い年中行事は、地域生活と遊離して、次第に変貌または消滅しようとしている。これに代って現われたのが、コミュニティ・サービスの一つとしてのプログラム・サービスである。地域生活の流れにあわして、地域住民の要求に応じて、設定されたところの行事である。したがって、地域住民は、このサービスに応じて参加し、さまざまな、文化・教養を身につけ、地域住民の接触をすすめようとするものである。

従来、この仕事をしていたのは、地域の公民館や同分館、あるいは社会教育の機関であった。内容的には、地域の社会・政治・経済に関して啓蒙をし、共同思考をするための講演会・座談会・討論会のようなものの開催にはじまり、地域社会の産業や技術に関する学習をするための行事、さら

には、地域住民の趣味の向上や娯楽の享受のための行事、あるいは体育祭・芸能祭・文化祭・音楽会・共進会などの行事がそれに当る。

しかし、このように地域内における行事のほかに、他町村とのコミュニケーションを目的とする諸活動、あるいは、さまざまな面での先進地の調査・見学、あるいはスキー・スケート・キャンプ、対外試合などのような、地域外において行なわれる活動への推進、というようなものもあろう。

これによって地域の人々は、さまざまな文化に接し、教養を身につけ、広く知見を磨くということもできるし、この意味では、価値の高い余暇活動の機会を提供している、ということができよう。この場合、大切なことは、サービスの受け手、すなわち地域住民の希望関心をよく調べ、それをうまく取り入れるようにしなければ、折角、行事を提供しようとしても、十分な参加がえられないことがあるので、この点に注意することである。

要するに、どんな内容を取りあげると、地域の人々の積極的参加を促がし、かれらから喜ばれ、地域生活を豊かにするかを、常に検討することである。

また、行事をむやみに行なっても、地域の生活のリズムや、地域住民の労働との関係を、無視してはならない。みんなが、よろこんで集まることのできる日を、慎重に吟味することである。

さらに、サービスの対象を、初めからはっきりと考えておくことも大切である。たとえば、老人向き・壮年むき・青年むきというようなプログラムも考えられる。あるいは主婦だけ、未婚の女性のみ、嫁としゅうと、というように、行事の目的に応じて、対象をはっきりさせていないと、折角の行事の意義が失われることもある。

なかでも、地域問題について、共同思考をしようとする場合には、問題や論点をはっきりさせること、あらゆる階層のものから、代表意見を出させ、それらを集団的に検討していくことなど、演出技術を考えなければな

らないものも多々ある。

わが国では、クラブというものが育っていない。大きな会社や学校では、クラブを育てようとしているが、地域のクラブとなると、非常に少ない。

クラブは、もともと志を同じくするもので作られた集団であって、それはできあがったら、独立して歩いていく。たとえば、ゴルフのクラブのように、会員が固定し、独自のクラブハウスをもち、一定のルールのもとで、ゴルフという活動を中心として、社交がなされる。ロータリークラブ、ライオンズクラブ、その他さまざまあるが、同じような性質のものである。しかし、社会教育の対象となるような地域集団、たとえばスポーツのクラブや趣味・教養のための集団では、自前のクラブハウスのようなものをもつことが困難である。そこで地域社会は、これらの集団に対して、場所を提供するようなことが行なわれている。たとえば、地域の体育館に地域のスポーツ団体が必要とするような部屋とか、練習場の貸与などを行ない、その他さまざまな地域集団に対して、公民館を利用させるようにしているのは、その例である。

スポーツのようなものは、練習をする場所がなければ、クラブの主要目的を達成することができない。ヨーロッパでは、このようなクラブは、固有のメンバーをもち、練習するための運動場や体育館などを所有し、さらに指導者をもっているのを、通例としているところが多い。これに反し、わが国では、同好のものがクラブを作っても、そこにあるのは、名簿だけであって、練習の場所をもっていないので、それを探し、借用するという形をとっているのが、なかなかクラブが育たないというのが実状である。

地域住民の集団を育て、健全な余暇活動に導くためには、公共の施設をクラブに貸与し、そこでクラブとしての諸活動ができるようにしなければならないであろう。コミュニティのクラブ・サービスは、このような意味

を、もっていると思われる。

とくに、社会教育の対象となっている地域集団は、経済的にも、かなり困難な状態にあるものが多い。住民の余暇活動は、受益者負担を原則とするとはいえ、これらの集団生活や活動が、地域生活を充実させ、好ましくない活動へと、向わんとするものに、方向転換をさせようとするものである以上、地域社会の責任において、経済的な援助を与えることも大切である。多くの市町村では、このような考えのもとに、ある程度の補助金を、与えようとしているが、これもクラブ・サービスの一つであるといえよう。

今日の地域子ども会も、性格からいえば、クラブまたは地域集団として、取りあげることができよう。

今のところ、子ども会の育成は、学校の仕事のように考えているものが多いが、本来は、子どもたちが、学校生活とは別に地域内において、健全な地域生活を営むことを目的としている。この意味では地域社会は、この子ども会を、育てるように援助することが大切なのである。

とくに夏の休みなどは、学校や家庭を離れて、地域内の子どもたちが、集団的な活動をする機会を、多くもっているのであって、これは、子どもの集団に対する適応性を身につけ、相互に理解しながら、遊びなどを中心に、地域生活を健全にしていくためには、地域子ども会については、大いに配慮しなければならないものである。スポーツ少年団・ボーイスカウト・ガールスカウト、その他子ども会に類するものについても、同じことがいえるであろう。

今日、青年団活動は、非常に微弱になってきている。とくに、農村などでは、在村の青年が非常に少なくなっており、昔のように活動しようとしても、できないところが多い。その代り都市では、種々の職業組合などがつくられ、それらが、それぞれ下部組織をもち、たとえば、何々町の商店連合会の早朝野球とか、ハイキング、あるいは海水浴など試みるところが

多くなってきた。これらも、地域内の集団であるかぎり、それらの集団活動を健全に、かつ楽しくさせるようなサービスを、必要とするであろう。

なお、クラブ・サービスとしては、未組織の住民に対して、余暇活動の組織化をはかることを考えなければならない。地域の人々の多くは、クラブをつくるほどの積極性をもっていないのが、現在の状態である。そこでたとえば、フォーク・ダンスのサークル・民謡のサークル・老人のサークルなど、できる限り地域社会の成員が、互いにコミュニケーションのできるような集団組織を、作るまでの援助をすることが望ましい。

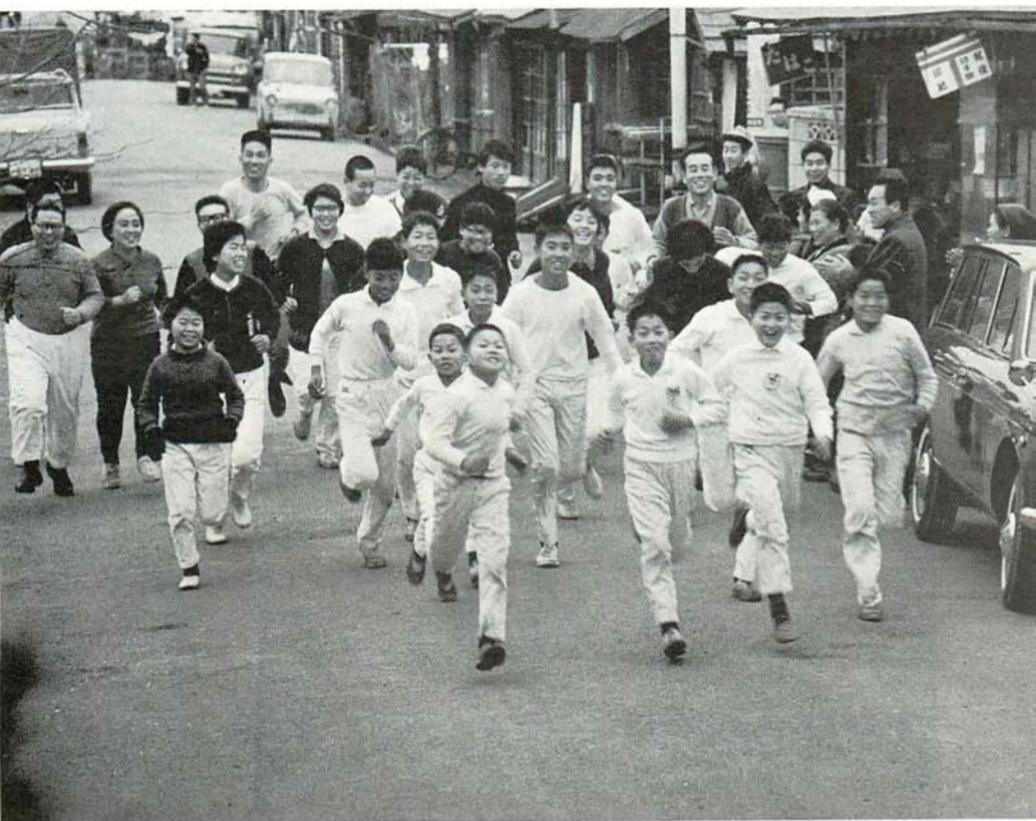
とにかく、学校でクラブ活動を行なわせても、地域のクラブ活動が育たなければ、学校だけのものとなる。大切なことは、学校でのクラブ活動によって得たところの技能や態度が、地域でのそれにつながりをもち、そこで住民はいずれかの集団に所属して、それぞれのものもっている欲求を満たすことが、地域社会生活を豊かにする所以であろう。

もちろん、地域社会はこれらの欲求のすべてを、満たさなければならないというのではない。すでに組織ができ、独立して、活動を展開しているものについてはよいとして、経済的に困るような集団や、あるいは指導その他の援助を、必要とするものについては、社会福祉や社会教育の立場から、もっと積極的に、クラブ・サービスを行なうべきであろう。

これらが地域内集団として、健全で堅実な余暇活動を展開するということは、それだけ、地域生活のレベルをあげることになる。もちろんこのことは、なんら商業機関を中心として作られているクラブを、圧迫しようとするものではない。それはそれとして、意義をもつのであるが、それだけでは、地域社会を盛りあげようとする意識も、わいてこないのではないか。

また、このようなサービスは農村のようなところで、とくに必要である。農村では、すでにのべたように、余暇活動に対する地域的圧力が強いので、個人々々の自由な余暇活動に、制限が感ぜられる。それに対抗する

ものは、上述のようなクラブや集団における活動である。個人として、余暇活動を行なうことは困難であるが、地域内集団の活動として、これに参加するのであれば、自分のうちだけがそれに反対することは、いけないというようになり、かえって、おおびらに参加することができるという事情と、あわせて考えておく必要がある。



おとなも、子どもも、みんな
力いっぱい元気で、マラソンをする
こうして、まちぐるみの親和が
生まれる。

鉄道弘済会広報部提供

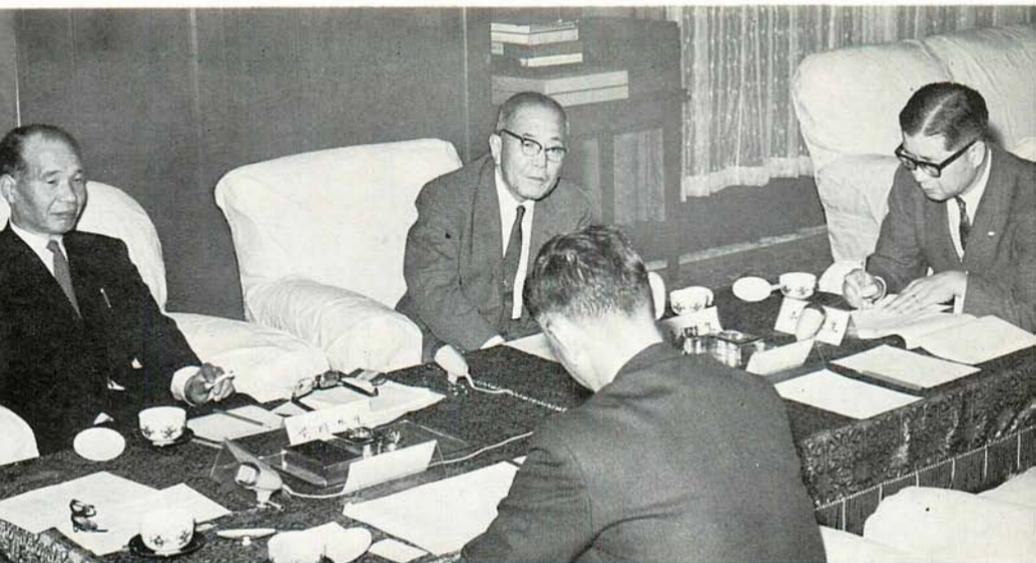


(左から小野、日笠、内村の各氏)

《座談会》

レクリエーションとスポーツ





(左から前川、東、一人おいて小川の各氏)

■ 出席者 ■

- 前川 峯雄 〈文博・教育大学体育学部長〉
- 東 俊郎 〈医博・順天堂大学教授〉
- 内村 祐之 〈医博・学士院会員〉
- 小川 長治郎 〈日本レクリエーション協会専務理事〉
- 小野 清子 〈日本体操協会実技実行委員〉
- 司会・日笠端 〈東大教授・当所評議員〉

I 報告の要約

日笠 この座談会は、恒例として理事長が司会をされ
座談会の目的 まして、企画委員がサブ司会をするというしきりにな
っておりますが、理事長がちょっと目を悪くされて、ご
欠席でございますので、私たいへん不慣れですが、進行と申しますか、司
会をつとめさせていただきたいと思います。

この研究所のことは、みなさますでにご存じでいらっしゃると思いますが、コミュニティに関する調査研究ということもございまして、それから、コミュニティとはどういうものかということ、一般に啓蒙することが大事だということで、理事長が発案されまして、こういう冊子が出ているわけでございます。これはいままでに11冊出ておりまして、いちばん最初に、コミュニティのあり方、それから都市の問題・農村の問題・婦人と地域社会、あるいは老人の問題・家族の問題など、いろいろなテーマをとり上げてきております。

今回はひとつ、レクリエーションの問題を、とり上げたらどうかということになりまして、前川先生にお願いして、たいへんりっぱな論文を書いていただいたのでございます。きょうの座談会は、それをもう少しひろげまして、スポーツというものも含めてお話し合いを願いたいと思いますので、一応、「レクリエーションとスポーツ」というふうにしてございませう。

それで、どういうお話をさせていただいても結構なのでございますが、話の筋として、四つほど柱を立ててみました。まず最初に前川先生から、ご

報告の内容を概略お話し願って、次に、これは主として東先生、内村先生、小野さんにご関係があると思いますが、健康とスポーツの関係についてとりあげてみたいと存じます。それから第三にレクリエーションの指導をどう進めるか、またその場所や施設を、どう整備して行けばよいか、という問題があると思います。最後に、この研究所の趣旨でございますが、コミュニティというものと、レクリエーションなりスポーツの関係ということで、できるだけおまとめいただいてはどうか。こんなような筋立てでございます。

それでは最初に、前川先生からご報告の内容を、概略お話し願いたいと思います。

前川 私は、われわれが生活していく場合
レクリエーションの意義 に、仕事に打ちこんでいくときと、仕事を離れたときがあって、そこでそれぞれの生活がある。そういう生活の一部に、とくに自分が生きがいをもってみたい、あるいは楽しみをもってみたい、という分野がある。こういう分野を、非常にひらくいえば、レクリエーションというふうに、考えてみたわけなんです。

そして、それを見ようとする場合に、レクリエーションというようなものが、生活のなかに急激に現れてきたものではなしに、さぐってみると、昔からの日本人の生活にもあったようだ、というふうに感じまして、それでは、昔はどういうことをやっておったのか、また今はどうなんだろう、ということを考えてみますと、今はレクリエーションというものを意識的にとり上げてみよう、あるいはそれに関連した余暇時間を意識的にとり上げて、その余暇活動を本気で考えてみよう、というようになってきた。そしてそういう点が、昔と非常に違っているところじゃないか、という感じがするんです。

前川 それでは余暇のつかい方について日本人
余暇をどう使うか は、外国人と比べてみてどうだろうか。私は外国人
の生活については、あまり知らないものですから、
多少本を読んだり、人から聞いたりということで、まとめてみたわけでは
けれども、非常に違っているところがある。

自分の時間について、けじめをつけておらないのが日本人じゃないか。
働く時間と、働きから解放された時間——その解放された時間をどう使
うのかというようなことがらについて、けじめをつけておらないのが、日
本人の特色であって、そういう、いわば渾然とした生活をやっている中か
ら、だんだん近代化されるようになってくると、とくに余暇意識というも
のが高まってきて、その余暇の活動を考えてみた場合に、いろいろあるだ
ろうけれども、自分自身にとっても、あるいは社会にとっても、ためにな
るような活動というものを、これからさき考えてみなければ、一生涯、生
きていこうとするときに、つまらない生活になってしまうということで、
だんだん外国人的な考え方に、近づきつつあるんじゃないか、という感じ
がしたわけなんです。

とくに今日のように、精神的にも、その他いろいろ追いつめられた生活
をしている場合に、もう一べん自分たちの生活を考え、そのなかで、仕事
とはまた別の分野で、もう一つ生きがいをはっきりと考える。そういった
ことがらを、これからさき考えていくべきじゃないか。レクリエーション
の本来の意味というのは、そういうところにあるのであって、ただ余暇活
動だけをやるのでもないし、それから、余暇をなんとか過ごしたらよろし
いんだ、という性質のものでもなくて、自分にもプラスになり、社会にも
プラスになるような余暇活動というものがあってしかるべきだ。

こんな気持ちで書きまして、そして最後に、われわれはコミュニティで、
生活をやっているわけですがけれども、そういう生活というのは、いかにあ
ったらいいんだろうか。私はその場合に、こんなことを常に感じているん

です。

前川 だいたい自分が住まってい

コミュニティ・レクリエーション るまわりに、どんな人があるのかと
考えてみると、あまり知らないんで
すね。隣近所が何しているかぜんぜん知らないで、自分は主として、職場
と家庭生活の二つだけをもっている。自分の住まっている地域社会、とく
に地域社会のレクリエーションを、どう考えたらいいのかということにつ
いて、あんがい無関心でおるんですけれども、それでいいんだらうか。も
っとみんなで、地域社会生活というものを、レクリエーションの面から、
考え直してみてもよかるう。

そういう場合に地域では、もっとみんながレクリエーションとして参加
してくるようなサービスがあったら、それに応じて、地域の人とのコミュ
ニケーションも行なわれるんじゃないか。こんなつもりで、これをまとめ
ようとしたわけなんです。

日笠 ご報告の内容について、もう少し話し願えますでしょうか。

前川 私は、昔の人といまの人のレクリエー

昔のレクリエーション ションについての考え方に、非常に違いがある
と思うのは、昔は自分でどうしようかという意
識、いわば、自分自身のレクリエーション意識とか、余暇意識というもの
が、非常に少なかった。

そういう場合に、どんな生活がなされておったかというのと、だいたい、
地域行事がレクリエーションの主要なものになっていた。それ以外に、徳
川時代の禁令のようなものを見ますと、遊んではいけないとか、そのほか
遊芸についての戒めとか、いろいろの形のものがあって、結局、地域のみ
んなが公然とやってもよろしいのは、行事の日における活動といったもの
が、中心になっておったと思うんです。

そういう行事をずっと洗ってみますと、あんがい多彩なものがありまし

て、お正月にはじまってお節句があり、あるいはお盆があり、収穫祭とかお祭とかがあり、その他、地域の生活を盛り上げるようなものを、いろいろもっていった。

当時の地域は、非常に拘束性をもっていましたから、そういう月の行事活動は、みんながやるのが当たり前で、それから離れていったらまずいんだという形で、いわばレクリエーションではないんだけれども、いま考えてみると、レクリエーションらしいものが、公的な形で行なわれておったのが、昔ではないかというように思うんです。

前川 ところが現代になってみると、一つ今日のレクリエーションは、そういう行事がもてなくなったということ、とくに昔の行事というのは、農村的な行事ですから、それに合わせてレクリエーションがあったけれども、都市が発達するようになってくると、その行事に合わせてやっていくことができない。

そのうち日・月・火・水・木・金・土という週制がはじまって、週に合わせて、われわれの生活のリズムが展開されるようになった。もう一つは職業生活が、昔はほとんど農耕生活にあわせていけたんですけれども、今日の都市生活者には、非常に多様な職業があって、生活のリズムもみんながばらばらになってきた。これが現実だろうと思うんです。

したがって、昔のような共通行事中心のレクリエーションが、行なわれなくなって、個人々々で、レクリエーションをもっていこうというのが、現代生活の特徴じゃないかと思います。

明るい楽しい社会を
つくるために

前川 そういう場合に、個人が思い思いに、他人のことをぜんぜん顧慮することなしに流していき生活が、現代のレクリエーションの基礎となり、てんでんばらばらになっていくと、やっぱりいろいろな問題が、でてくるんじゃないかと思うんです。とくに私どもが心配しているのは、余暇

ゆとりができるようになって、楽しみを求めようということを考えてくると、事情が変わってきますね。

さらに高度経済成長と関連して、バカンスだの、レジャー時代だのといわれましたけれども、ああいうようなものも、背景には、経済水準というものがあったことは確かです、日本でも、経済水準がだんだん上がってくるに従って、レクリエーション条件が整ってくるということが、あるんじゃないかと思うんです。

前川 それじゃ、自分たちでレクリエーションをやる**生活意識** ろうという気持ちは、どうだろうか。これは主体的条件だと思うんですが、そういう条件については、まだ必ずしも十分とはいえない。各自の生活を考えてみたときに、たとえば健康の問題、とくに精神衛生の面、あるいは人生のすごし方という面からいって、本当にこれをまともにとり上げなきゃならない、という切迫した気持になっているのだろうか、どうだろうか。

この点が問題だと思うんですが、イギリス人、あるいはドイツ人あたりの書いたものを見ますと、自分たちの生活のなかに、それがあって然るべきなんだ、という意識がはっきりしておいて、そこで、たとえば休暇をどう過ごす、あるいはこんどの日曜日をどう過ごすといったものが、生活計画の中にあるように思います。そういう意味で、自分たちの生活を大事にするような考え方が、一つの条件です。

前川 かりに、そういう気持ちを、みんな**家庭・職場・地域社会** れぞれ持てるようになったとしても、しからばそれを、どこで満たしたらいいんだろうかということが問題になります。

今のところ、大きな分野として、家庭と地域社会と職場があるんですが、職場と家庭、あるいは学校のようなところは、レクリエーション活動にも、割合適当な場所であるけれども、地域のほうは今まで、熱心にそれ

を推進することをやらなかった、という感じがするんです。

最近、例の河川敷の問題、子どもの遊び場の問題、あるいは公民館をもっとどうしよう、こうしようということが、でておりますけれども、地域のほうが、ずっと遅れておったものですから、その間隙をぬって非常に発達したのが、日本の場合には、商業施設といましょうか、商業レクリエーションじゃなかろうかと思うんです。

前川　そういうことで、商業レクリエーション
地域社会の立ち遅れ　のほうが、ドンドン発達していった場合に、そこに大きな問題がおこってくる。たとえば余暇の乱用、あるいは悪用という面がでてくるんじゃないかと思うんです。

そこで、いま立ち遅れておるけれども、どうしても公共的な立場から、たとえば、子どもには子どもにふさわしい場所に配置して、子どもが十分遊ぶことができるようにする。あるいは学校の子どもでも、学校から帰ったら、十分活動できるような場所を、用意しなきゃならないだろう。同じように青年にとっても、壮年にとっても、あるいは老人にとっても、婦人にとっても、それぞれ適当な場所がなければ困る。

さてしからはば現在、場所的条件はどうなんだろうか、ということになってくると、その点では、満足すべき状態ではない。これから先、もっと力を入れなきゃならないのは、そこいらじゃないかといったようなことでございます。

Ⅱ レクリエーションとスポーツのあり方

日笠 いま前川先生から、報告の内容をかいつまんでお話しいただきまして、レクリエーションは現代の生活にとって、非常に大事なものである。しかしそれには、いろいろな問題がある、というご指摘がございました。

このへんで、スポーツとレクリエーションというものは、いったいどういう関係になるのか。この両者は、互に重なり合っている面もありますし、スポーツ独自の問題もありますけれども、きょうは、できればレクリエーションとの関係、あるいはコミュニティでのスポーツ、そういうようなところに重点をおいて、まず東先生から、お話をお願いしたいと思っています。

東 スポーツというものは、スポーツとして**生理的なひずみの回復**の一つの存在価値をもっているし、形をもっているんですが、レクリエーションというのは、私は、この人間活動なり生活の場においてできてくる一つの生理的なひずみ、これを元へ還すということが、レクリエーションの大きな意味だろうと思うんです。

したがって、そのひずみを元へ還すためには、いろんな方法があるわけですが、ひずみがどうしてできるかといえば、近代社会においては、産業の細分化、あるいは単調化というようなもののために、一局所のひずみが多い。頭脳労働であれば、精神の中にひずみができるし、筋肉労働であれば、その筋肉労働に使う場所が、昔と違って、非常に局限されるので、あ

る一定のところに、ひずみが出てくる。そういうものを調整するのが、レクリエーションの大きな意義じゃないか。

そういうように考えますと、スポーツそのものも、レクリエーションとして使える、ということが考えられます。というのは、スポーツがもっている



《東 俊郎氏》

意味のなかに、目に見えない協調性とか、ルールを守るといった精神面が、非常に強調される。そういうものが、コミュニティの一つの要素として、重要なものであるとすれば、スポーツを利用したコミュニティ・レクリエーションというものも、スポーツの役割が大きくなるだろうと、こういうふうに思っております。

レクリエーションに適する スポーツ

東 一方、スポーツ活動そのものが、身体に及ぼす影響を考えれば、筋肉疲労に対する潤滑油として、スポーツが利用される。

それから、スポーツをやることによって、自分の力を試すということが、意識の高揚に役立つ。あるいは活動意欲を見出して、生産能率向上がでてくるということから、スポーツが、レクリエーションとして活用される。

しかしだからといって、すべてのスポーツが、レクリエーションであるかという、そうはいかない。スポーツにはそれを超えた、スポーツそのものの勝敗に関する、大きな努力が強要されて、本人の体力、あるいは技術の極限を伸ばすという一つの目的があるわけですから、レクリエーションとして活用されると同時に、スポーツはスポーツの場というものがある。

それでは、レクリエーションのスポーツというのは、どういうふうなものであろうか。さきほど言いましたような、レクリエーションの意義から考えれば、激しさ、あるいはやり方に限度がある。そういうレクリエー

ジョン・スポーツというものが、組み立てられていいんじゃないか、こう思うんです。

現在、一般社会で行なわれているレクリエーションのスポーツというのは、だいたい限定されているように思います。たとえばピンポンだとか、ソフトボールのような軽いスポーツですね。それから体操・バレーボール、そういうふうなものが、普通一般のレクリエーション・スポーツになっている。

だから、レクリエーションとしてのスポーツは、強さにも限度があるし、また種類もおのずから限度がある。レクリエーションというものは、老若男女すべてが、やらなきゃならんとすれば、年齢的な配慮によって、レクリエーションとしてのスポーツが、組み立てられなければならないと思います。

東 スポーツをコミュニティ・レクリエーションとして使うのは、勿論さきほど言いましたように、身体的な面のひずみを直す、ということもありますけれども、私はいちばんいいことは、協調性とか、ルールを守るということを、スポーツ活動を通じて体験していく。これは結局、大衆の融和によって、コミュニティが健全に育っていくためには、どうしたってお互い人間性の共通の喜びというものがなくちゃいけない。それにスポーツを利用する。そういう意味で、スポーツをレクリエーションとして使っていくことは、社会のコミュニティ生活というもののうえでは、非常に大切なものだ、こういうふうに考えます。

日笠 内村先生、いかがでしょうか……。

内村 きょうは、「レクリエーションとスポーツ」という座談会で、私はスポーツにも関係あるけれども、同時に精神衛生というほうにも関係があるので（笑声）、両方取りまぜたようなことで申し上げます。私、前川



《内村祐之氏》

さんの原稿を読ませていただいて、非常に興味ぶかく、また、いろいろと昔からの移り変わりといったようなことも、実によくわかって、もうあれで、尽きているような感じさえいたしますけれども、ただ二、三私の感じたこと、あるいは、前川さんのお書きになったのを、補うような意味のことを、申し上げてみたいんです。

私の意見では、昔の日本、あるいは一般の社会よりも、今日の都市生活というものは、はるかに、レクリエーションを必要とするような生活状態になってきた、というふうに感じます。機械力が発達して、仕事が割合に単調になったとか、あるいは休日が多くなって、1週間に2日も休みができるというような、形の上だけから見ると一見、生活が非常に簡単になり、ユトリができたようにみえるけれども、実はそうではない。ことに都会生活をして、多数の人が、お互いに関係しあうということは、人間関係が、昔より、はるかに複雑なものになっておって、人の心持ちに、不満だとか、競争意識だとかいった、せまい範囲内での生活には、少なかったいろいろな不快な感情を起こす問題が多くなってきたこと。

もう一つは、仕事が簡単になるということは、やさしそうでありながら、それを続けることは、精神的にはマンネリズムからおこる欲求不満でしょうかね。何か不安を起こすようなことになってきておる。そういうことを考えると、現代生活というものは、昔より、はるかになんとかして心を休める、気分を転換するということが、必要な時期になっていると思うんです。

内村 前川さんがおっしゃる、レクリエーションというものは、何かそれによって、自分の生活にプラスになるようなものであってほしい、というご希望、これは私も全くそのとおりでありますけれども、私

はもう少し要求を下げて、害にならないもので、やっぱり必要なものがある。どっか山の上へ行って、寝ころんでいるということは、ちっとも人生のプラスには、ならないんだけど、しかし、現代生活の不安をとり除くレクリエーションの意味では、やはりプラスになる。

だから、バチンコだとか、なんとか余り有益とは思えないことによって、自分のレクリエーションの時間を無駄に使うことは、もちろん避けなくてはなりませんけれども、もう少しレベルを下げてください、必要じゃないかという感じがするんです。

内村 私、長年の経験でいちばん痛切に感
仕事のほかに趣味をもつ じるのは、社会人としてりっぱな方が、いろいろ精神的に、不安をもっておられる。そういう方たちを、快方に向うように導いていくときに、なにか趣味をもっておられる人と、そうでない人とでは、指導するむずかしさが、非常に違うということなんです。

仕事よりほかに、趣味がないという人ぐらい、指導のむずかしいものはない。そこでスポーツでもいいし、植木いじりでもいい、山登りでもいい、なにか趣味をもっておられる方は、それを、気分の転換の方法として使うことによって、神経的のイライラを善導するのに、非常に役に立つ。

そういう意味で広い意味でのレクリエーション、これが日本の社会教育のうえて、これからは、非常に必要なことのように感ずるんです。

**内閉的傾向の人を
ひっぱり出す**

内村 レクリエーションとして、スポーツがいい
役割をもつということは、私自身も大いに経験して
いるんで、いま東さんが言われたことに異存はなく、
その内容も東さんの言われるとおりでらうと思うんですが、私、もう一つ、
コミュニティを、いかに育てていくかということで、考えておいていいと
思うのは、だいたい多数の人間についてのご意見を、前川さんがお書きに
なったけれども、実際には、人の性質にはずい分いろいろな型がある。こ

とに非常に出不精な、人と接触することを好まない、自分ひとりで楽しみたいというような、われわれのほうの専門の言葉でいうと、内閉的傾向の人が、あながい世の中に数多いんですね。

外に向かう性質の人は、みんながやろうと言えば、すぐコミュニティには行ってやる。けれども、多かれ少なかれ内閉的の人は、お尻が重くて、引込み思案で、どんなものをもっていても、なかなかやらない。そういう人たちを、いいレクリエーションの場に連れてきて、みんなとのいい人間関係において、コミュニティの一員とさせる。それがやはり、一つの大きな問題じゃないかと思うんです。

そういう人たちは、小さいときから、そういう傾向の人ですけれども、学校生活なんぞしているときには、学校のクラブ活動とかスポーツとか、いろいろなことでだんだん習練されていくし、それから世の中に出て、就職でもすれば、そこでまた、不愉快な人間関係が一方にはあっても、団体的な訓練もできる。しかし、そういう機会の少ない、たとえば主婦みたいな人、あるいは就学以前の小さな子どもたちを、何か共通に楽しめるようなスポーツとか、そのほかの趣味によって、そういう場に引き出していくということは、地域社会研究所の一つの問題じゃないか。

こういった傾向の強い人というのは、数は少ないけれども、その傾向をもった人は、あながい世の中に多いんで、将来、健全なコミュニティをつくっていくとする努力の場合に、そういう個性ということは、やっぱり、考えておかなくちゃならん大切なところだ、という感じがするんです。

小川 スポーツとレクリエーションの関係

重なり合った二つの輪 は、さきほど東先生などのお話を承って、私もそう感ずるわけですけれども、スポーツという言葉の起こりは、ラテン語のディスポートですが、その意味は英語のキャリアウエイ（忘れさせる）ということです。いわば気分転換のために用い

られたものは、体をつかうことが多かった。それを総称して、スポーツといったわけです。

スポーツ振興法では、いろいろなゲーム形式のスポーツのほかに、野外活動的なものも含んで、いちおうスポーツと称するというふうに解釈しているんですが、それが全部レクリエーションかという、け



《小川長治郎氏》

っしてそういうものじゃありません。レクリエーションの大事な条件は、自主的であるということ、それから生活の糧にならないということです。

こう考えると、プロ・スポーツはもちろん、範疇外としまして、自主的であるということは、自分から進んでやるということですから、スポーツのきれいな人は、スポーツをやりたいと思わないでしょう。したがってスポーツは、レクリエーションにならんわけです。結局スポーツとレクリエーションの関係は、少しずつ重なった二つの輪のような形になるんじゃないかと思うんです。

レクリエーションのなかには、スポーツなど身体活動を伴うものもあれば、文化・芸能・趣味など間口は大変広い。しかしその中で、スポーツが中心であり、もっとも大きい分野を占めていると思うのです。

日笠 いまのお話に、レクリエーションのなかでも、スポーツというのが、中心になる大事なものだということがありました。小野さん、いかがでしょうか……。

まずスポーツを楽しむ

ことから

小野 私は、完全に競技スポーツばかりで、レクリエーションのほうはわからないんですけれども、このごろの若い方たちって

のは、楽しむことの楽しみ方を、知らないような気がするんです。

私はいちおう主婦の立場ですから、それからしますと、スポーツというものを、まず観念的に、完全に、競技者のためのスポーツであるみたいに

考えてしまって、レクリエーション自体を知らなすぎる。そういう点で、さきほど先生がおっしゃいましたように、楽しみがなきゃならない、とい

うことは絶対で、しかもその楽しみ方を知らないということは、一般の主婦の方にとっては、まったく未開拓の点だと思うんです。



《小野清子氏》

ですからたとえば、バレーボールをやるなら、子どももっている軟かいボールでやるとか、必ず点数づけをすとか、そういう手段を使って、いい意味で勝負をつけながら、楽しませていく。そういう

方向にもっていったら、どうかと思うんです。家庭の主婦こそ集団の楽しみ方を、あまりにも知らないと思います。

前川 なるほどね。スポーツをやっておっても……。

小野 スポーツというと、テレビなどで、一流人のゲームを見る機会が多く、そのことがある意味で、自分には遠い存在と思われると思います。勝敗はきびしいものですが、年齢、男女によってルールを少し考えると、これほど楽しい、また、多面にわたって効用のあるものはないと思います。

スポーツは心の持ち方で
レクリエーションになる

前川 私は、東先生とちょっと違うんです。スポーツの種目で、これはレクリエーションになるか、ならないかというんでなし

に、スポーツをどういうふうにするかという使い方、あるいは態度のほうに、レクリエーション的か、そうでないかという区別が、あるんじゃないかと思っています。

どんなに激しそうに見えても、これで自分は楽しいんだ、ということがあります。単に感覚的なものじゃなしに、どんどん技能や記録の面で進歩がある。前よりは、こんなにできるようになった……。これは非常に大きな楽しみだと思うんです。ですから、激しいスポーツだからといって、これはレクリエーションでないんだというふうに、私はとっておらない。

プロがかったものは、かなり強制されておりますが、そうでなしに自由な意思で、自分はこれをやりたいんだというものがある、それにドンドン打ち込んでいくということになれば、これははっきりと、レクリエーションと言えるんじゃないかと思いますがね。いわゆるスポーツのようなものは、レクリエーションの中身だというふうに、私はみているんです。

小野 それを、たいへん感違いしているんじゃないか、と思いますね。

前川 一般にいわれているように、軽スポーツはレクリエーションだ、そうでないヘビー・スポーツは、レクリエーションでないんだ、という分け方じゃないんですね。

小野 私もそう思います。たとえば卓球・バドミントンなんか、一番レクリエーション的のスポーツのように思って、実際、大学あたりでも、そういうふうな分け方をするんです。見た目よりは、やってみて重労働ですがね。

小川 文部省では、割合軽いものをレクリエーション・スポーツとしているんじゃないですか。

日笠 種目じゃなくて、同じスポーツでも、やり方だということですか。

小川 やり方ですね。その人の心の持ち方というか……。私は競技スポーツでも、前川先生がおっしゃったように、とにかく努力すれば記録が上がるとか、そういうことに非常に楽しみをもてば、面白くてしょうがない、という時期があると思うんです。だからそれは、その人にとっては、レクリエーションとして考えていいんじゃないか、と思いますね。

日笠 小野さん、これまでずっとおやりになっていて、どうですか。

小野 私、練習中は苦しかったり、いやな種目のときは、いやですけども、なんといっても楽しいんですね、絶対的に。演技しながら、自分で寒けがするような演技が、できたときっていうのは、練習や試合にかかわらず、ほんとうにうれしいんです。あれがあるから、止められなかったん

だろうと思います。

前川 そうでしょうね。私はレクリエーション
期待・満足・思い出 の立場からいうと、楽しみというものを、三つの
時点で考えることができると思うんです。

その一つは、「期待」ということですね。こんど試合があるから、こんど
ああいう会合があるからというので、何週間も前から期待をもっている。
これが楽しみの一つだと思います。

それから、やっていると自分を忘れ、その他いろいろなことも忘れてしま
う……。没我的だということ。そうすると結果的には、いろいろな進歩が
あったり、記録が上がったり、あるいは、みんなと一緒にやれたという「満
足」がありますね。

第三番目は、あとから思いかえしてみて、ああいう楽しみがあったとい
う「思い出」が残っていく。だから「期待」と、「満足」と、「思い出」
この三つが、実は楽しみだというふうに、私はとっているんですがね。

日笠 自分がだんだん上手になっていくというのは、やっぱり楽しみで
しょうね。

前川 それは絶対ですね。それがなかったら、あきらめて、ほかへいく
と思うんです。ある程度まで伸びて、カベにぶつかったら、そのカベを貫
こうと努力するものもあるし、もうここらでだめなら、ほかへ移ろう……。
そこで趣味の移動があるわけですね。

小川 人によって、考え方が違うと思うんです
日本選手と外国選手 けれども、大まかにいって、外国人のスポーツに
対する考え方と、日本人のスポーツに対する考え
方とを比べてみると、日本人のは、親のかたきでもとるような……(笑声)。

小野 そうですね。レクリエーションという地盤があって競技があるので
なく、日本は競技の方が先行しているので、深刻になりすぎるのかもしれ
ません。

小川 非常に真剣になりすぎる感じがするんですが、その点、外国人はどうなんですかね。

前川 かれらはそんな気持ちではない。まあ真剣さも、あることはあるでしょうけれども、あんがい楽しんでるのじゃないですか。オリンピックのときでも、日本人の勝った、負けたの表情と、外人の表情とは、ずいぶん違うと思うんです。

小野 違いますね。でも、私は正直いいまして、優勝しようと思っていた人が、二番になって表彰台にあがったとき、にこやかに握手しているのを見ると、ふしぎに思います（笑声）。どうして、もっとくやしい顔しないんだろう。

そういう気持ちが、私にあるのかなと思ったり、あさましいと思うんですけど、その点、日本人はだめでも、よくても表情を顔にあらわさない。表彰式というものに、なにか歓喜より静寂なものがあるんですね。

日笠 根性なんていうのは、違うでしょうか、外国と日本と。

小野 その点、むこうの方は根性をもっとも何かあっさりしてますね。

前川 どうですか……。人生観のなかで、スポーツを、非常に高く評価するものと、それほど評価しないもののがあって、うんと高く評価すればするほど、負けた場合は、くやしくてしょうがない。そうでもなく、第二義的のいったら、言葉が悪いかもしれませんが、そのぐらいの位置にスポーツをおくものにとっては、まあ、みんなとやってよかったんだ、期待しておった程度のことのできたんだ……。そういう意識になるのではないのでしょうか。

小野 そうでしょうね。たとえば私たち、オリンピックへまいりますと、まわりの報道関係からの、目に見えない抑圧というものが、ひどいんです（笑声）。

ふだん練習しているときは、およそ無関係の私たちの練習なのに、いざ

大会とかオリンピックになりますと、急に日の丸をあげろとって、しょせん無理な話なんですけれども、それが強制されるわけですね。ですから、実力の十分あるものに強制する場合と、ないものに日の丸あげろといった場合と、精神的な差というのはものすごいんです。

その点むこうの選手は、前の日オリンピック村でツイストかなにか踊って、次の日メダルさげて口笛ふいて帰ってくる。ああいうのは、その国の人間のスポーツというものの考え方自体が、非常に違うんじゃないかと思っています。

日笠 もういっぺん前にもどりまして、最近、**体位と体力**と体力ということが、非常に問題になっております。

団地っ子のような形で、体位は一見大きくなっているが、体力のない子どもがふえてきた。そういうような問題について、コミュニティでのスポーツと関連して、なにかお気づきの点がございましたら……。

東 私の考えとしましては、体位というのは普通一般には体格のことですかな？ 身長・体重・胸囲、これが体位ですね。

体力というのは、機能の問題でしょうね。これは新聞なんかに、しょっちゅう書かれているんですけども、現在の青年は、ドンドン身長が伸びている。ことに女子においてはそれが著明である。しかしながら、胸囲はそれに伴わない、体重も伴わない。運動機能は、さらに伴わないということが言われておるわけですが、体位といい体力といい、これは生活様式と栄養と、そしてレクリエーションも含んだ一つの鍛練、トレーニングというもので左右される。身長が伸びるといのは、日本人だけでなく、全世界の傾向ですね。人間の発育の世界的な波じゃないかと思うんです。栄養の問題だけでは解決しない。

ヨーロッパのほうの中学生程度の身長発達でも、日本と同じように、ここ数年で10センチぐらい伸びている。そしてやはり、体力がそれに伴わな

い。アメリカあたりでは、そのために何か白書がでましたね。

内村 それは都会だけじゃなくて、いなかで
ふえつつある肥満児 も全体として体位が伸びて、体力が少なくなっ
ているの？

東 ええ、それで僕はわからない。

内村 どういうわけだろう。労働が少なくなっているからかな。

小川 鍛練することが少ないんでしょうか。

東 生活の内容をもっと分析してみなきゃ、わからないんだけども
……。

小川 ほんとうに、デブの子が多いですね。

東 まったく肥満児が多くなっている。

日笠 私どものほうの中学校のニュースを見ましたら、500メートル以
上いっぺんに走った子は、あんまりいないということが、でていましたけ
れども（笑声）。

東 とにかく世界の風潮ですけれども、機械文明が発達してきて、肉体
を使うことが少なくなった。学校にかようにしたって、電車やバスもあり
ますし、すべてからだを使うことが、非常に少なくなってきたのが現
状で、そのうえに、勉強のほうに時間をとられることが多くなって、スポ
ーツは一部分に限られ、一般的に自分で活動することは、少なくなってい
る。そういういろんな要素が、まざってきているんじゃないかと思うんで
す。

東 ただ、日本人と外国人と比べますと、
日本人は上体の力が弱い 同じ体力が伴わないといっても、日本人がと
くに伴わないのは、上体の力ですね。握力、
牽引力が日本人は弱い。肺活量なんかは、そんなに違わないんですが、上
体の筋力が違う。

簡単にいえば腕の筋肉、これが非常に弱い。もっと上体を発達さすよう

にしむけなくちゃいかんと思います。

内村 それは外国人に比べて弱いのか？ それとも、日本の何十年か前に比べて弱いのか？

東 いや、外国との比較で……体力を、握力・背筋力・投擲力・跳躍力、それから、肺活量・息止め時間などで比べてみると、肺活量・息止め時間は、むしろ日本人のほうがいいんだね。握力と背筋力が弱い。足なんかは、外国の同じ14歳と比べた場合は、日本のほうがすぐれている面もある。ここはちょっと、考えなくちゃいかんと思いますね。

これはなんで起こっているか。その点、わからないんだけど、そういうことを考えたって、とにかく筋肉は、鍛練すれば強くなるんだから、小学校の体育なんか、そういうところに重点をおいた体育課程を、きちんと組み入れて、もう少し鍛練的にやったほうが、いいんじゃないかと思うんです。

日笠 きょうは理事長がおられないんですけども、理事長はいつも、姿勢をよくしななきゃいかんということをおっしゃいましてね。私も小学校のころを思い出すと、姿勢ということをやかましく言われたものですが、今あんまりそういうことは言わないんでしょうね。そうでもないですか。

東 戦後、直立不動で壇の上に立ったり、きちっとすることがいけないような、むしろただただしているほうがほめられるような（笑声）時世が、ある程度ありましたからね。これは悪くなっているでしょうね。

内村 僕はレクリエーションとしち

プロ・スポーツの社会的責任 ゃ、スポーツがいちばんいいというスポーツ礼賛者ですから……。

ただ前川さんがおっしゃったように、商業スポーツというものが、はいつてきちゃったために、非常に弊害が起きているわけです。私はああいう商業スポーツをやっている人たちに対して、ある程度、金をもうけるのは

止むを得ないとしても、社会的責任があるんだから、青少年のためにプラスになるように、マナーを教えるとか、それから青少年のためのスポーツに、費用を出してやるとか……アメリカなどでは、プロ・スポーツから青少年のスポーツのために、金を出してやったりしていますね。

そういうふうには、少しでもいいから、もっていけないかということをやうんだけれども、商業スポーツの人は、もうけることだけが頭にあって、そういう意識がないわけです。

ですから、商業スポーツ関係者も含めて社会一般に、そういうコミュニティの問題とか、青少年を健全に育てていくことが、社会的の責任であるという意識を、もっと伸ばさないといけない。もっと伸ばすというが、日本じゃ、ほとんどないと言ってもいいんじゃないか。

これが不足しているために、矢野さんの提唱なども、思うように伸びない。実業家とか政治家というものに、健全に青少年を育てるために、自分たちの利益を割いてやるという気持ちも、もっと出りゃいいと思うんだけれども、それができないことが日本の現在の一つの悲劇——というほどではないにしろ、いちばん欠けているところじゃないかという感じがいたしますね。

東 いまのプロ・スポーツからの還元、これを毒したのは、一つはアマチュアリズムだね（笑声）。今はそうでなくなったけれども、プロから金を貰うのは、アマチュアリズムをけがすという思想があって、そういうものは貰わないということが、最近まであった。

背に腹はかえられなくなって、その後、自転車振興会から何億と貰ったり、競馬協会からも、いろんなところから、喜んで受け入れるようになったけれども、はじめから、そんなことを言わないでやっておったら、もっと自然の形に、もっていったらと思う。

チーム意識過剰はスポーツマンシップにもとる

内村 僕はスポーツマンだけれども、うんとスポーツマンの悪口いうん

ですよ。スポーツというのは、チームプレーを養う、つまり自分のためじゃなく、チームのためにプレーするところに非常にいいところがあるんだ、というけれども現状を見ると、自分のチームだけのことを思っていて、自分のチーム以外のことはちっとも思わない。

これはプロ・スポーツばかりじゃなく、アマ・スポーツにしたって、おそらく体育協会なんか、いろいろなスポーツの種類の間で、ご苦労なすっている面があるんだろうけれども（笑声）、意地っばりになっている。

東 そのために、簡単にまとまるものが、なかなかまとまらない。

内村 だから、チームプレーというものは、自分のチームだけでなく、すべて他のものを含めたものに対するチームプレーという心構えが、僕はほんとうのスポーツマン・シップだと思うけれども、実際はそれを非常に狭く解釈して、ただ自分の所属している団体だけがよけりゃ、それ以外には譲らないという傾向があるような気がする。

東 傾向じゃない、現実だろう（笑声）。

前川 この間、国体から帰ってきたサッカーの先生が、「府県意識が非常に強くなってくると、いたるところで、トラブルが起こってくる。審判の人々は、そのトラブルをうまく処理できない。府県意識が強いものだから、なかなか引きさがらない。こういうことを見るに耐えられませんでした」ということをいっておりましたけれども、やっぱりまだ出てくるんでしょうね。内村先生がおっしゃったような、広い気持ちになってくると、これはだいぶ違いますね。

東 これからの課題ですね。これはやっぱり、打破していかなければいけないと思います。

前川 さっき、とくにプロとおっしゃいました

益金の一部を青少年に たけれども、私は、射伴娯楽としてのギャンブル・スポーツの益金を、なんとか青少年のために還すんだという原則でも、立ててやっていけば、ずいぶん違うと思うん

ですがね。第I部の報告(31頁参照)で述べておきましたけれども、6,000万人余りを動員し、売上げ金が五千何百億にのぼるでしょう。その一部分でも、みんなそれぞれ割いていけば、青少年のために、ずいぶんいいものができるんじゃないか、という感じがするんです。こちらの東先生のお兄さんの東竜太郎先生(東京都知事)が、オリンピック前に、例のトトカルチョの問題を出されて、あのときは、非常に反撃をくいましたけれどもね。

日笠 ボーリングなんか、住宅地にできるのを、反対しているらしいです。ね。ボーリングは、スポーツなのかどうか……。

前川 ボーリングそのものが悪いんじゃないかに、あれをする人や経営していく人に、問題があるんじゃないかと思うんですよ。

東 それを経営する人の運営の仕方に、問題があると思います。欧米あたりには、りっぱなボウラーがおって……。

日笠 コミュニティにも、ボーリング場がありますね。

東 YMCAには、かならずあります。

日笠 それがどうして、夜中までやらなきゃならないのか……。

前川 あすこが純然たるスポーツを楽しむところでなく、他の何かのために集まる場所になってくる。それが、問題じゃないかという気がしますね。

Ⅲ どのように指導するか

日笠 内村先生のお話にありましたよう
レクリエーションの処方箋 に、コミュニティの主役といますか、主
婦と子ども、あるいは老人、そういうもの
を対象にしたスポーツでも、レクリエーションでも、
どういうものが適しているか。それから孤立しがちな
子どものお話も出ましたが、そういう子どもが、みんな
と一緒にできるようにするには、どうしていったら
いいかといったことについて、少し実例をあげてお話
しいただけませんでしょうか。



《日笠 端氏》 東 内村先生がおっしゃった内閉性、これが、あ
んがい多いんですね。普通、健康だと思っている方に非常に多い。日本人
はとくに多いんじゃないですか。

小川 そんな感じしますね。

東 これが、日本の社会生活が健全に発展しない一つの原因じゃないか
……。

内村 あるいはそうかもしれないんです。

東 ですから、そういうものをコミュニティの一員として、自分自身で
も愉快にやれるし、コミュニティ全体が、明るくなっていくというために
は、やっぱり、その人に適したレクリエーション活動の処方というものが、
あるんじゃないか。

私はレクリエーションは、セラピー（療法）だと思うんです。したがっ
て、療法である以上は、相手によって処方があるべきだ。年齢の問題もあ

るし、性の問題もあるし、性格の問題もある。ことにうまく指導して、レクリエーション活動によって、その人を引き上げようとする場合、いちばん対象になるのは、この内閉性の人だろうと思うんですね。

東 　　こういう人に対しては、専門家がいわれるよ
人間対人間の指導　うに、処方をつくって徐々に指導していくことが、
大事ですけれども、私はレクリエーションの場
に、それを引き出すときには、指導の方法が非常にむずかしいと思うんで
す。

これは指導するような態度じゃいけないんで、自分から、そこに出てくるようなふうに、仕向けなくちゃいかん。私は指導者でございます、というような顔をしては、レクリエーション活動というものは、発展しない。その人と自分と1対1、人間対人間という形でやっていかなくちゃいけない。こういうふうな心がけが、一般的に必要なんじゃないかと思います。

東　　そして、スポーツをレクリエーションとして利
組立式の指導　用するためには、さきほども限度があるといいました
が、やはりはいりいいような方向に仕向けていかなく
ちゃいけない、ということなんですね。

だから老人には、老人に適したようなスポーツ活動がある。それに、はいっていくためには、その前段階がまたあるだろう。この連中は卓球が好きだから、卓球をレクリエーション活動として、大いに普及しようとした場合に、卓球のできる人はすぐはいっていく。これからという人は、やはり逡巡する。そうすると、そういう人の、はいれるような卓球の仕方というものがある。

たとえば、アメリカの小学校では、スポーツ活動に子どもを入れていく場合に、リード・アップ・アクティビティといまして、野球をやらすとき、先生は初めから野球を教えない。大きなボールを投げて打たせる。そうすると、打つということに興味をもっていく。それだけでいい。そのう

ちに、ほうるということに興味をもつ。そして2年3年たつうちに、野球の形式というものを、自分で喜んでやるようになる。こういうことがあって、スポーツをレクリエーションとして使う場合には、はじめから完成されたスポーツを課すということではなくして、もっとシンプルな、分析した一つの身体動作というものを、それを興味ぶかくやらせていく。こういうような組み立て式のスポーツの指導が、私は必要じゃないかと思います。そういうふうに考えれば、子どもには子どもとしての、また婦人には婦人としてのスポーツというものがあると思うんです。

このごろ一般的に、テニスとかバレーボールなんか、婦人層に非常に多くなっていますが、これは、はいりいいんですね、女の人でも。だから、はいりいいものを、さらに、はいりよくして導いていく。こういうことでやっていくのが、非常に大事な問題だろうと思います。

楽しみを通じての
仲間意識

日笠 これは指導とか、上から押しつけるという
ような形でなくて、やっぱり楽しむということが、
いちばんの動機でございましょうか。

東 僕はそう思いますね。そういうふうにしむけていく。とにかく、自分からやっていくというチャンスを与える。そうすると今の内閉性も——重症の内閉性は、どうか知りませんが（笑声）、それで救われる人が、ずいぶんあるんじゃないかと思いますね。

内村 内閉性に、なぜなるかという、そういう人は感受性が強くて、自分の心が、ほかの人によって傷つけられやすい。そういうことで、ほかの人から干渉されたくない、ほかの人となるべく接触しないで、自分だけで楽しむという心理的な傾向を、もっているわけですね。ですからこういった人の中には、自然が好きでひとりで山へ登るとか、それから釣が好きで、ひとりで魚を相手に楽しむといった人が多い。

ところが山に登ると、同じような連中がたくさんきている。釣りにいってみると——山登りや釣りの好きな人が、みんなそういう内閉的な人だと

いうわけではないけれども（笑声）、自分の趣味について、ほかの人と心おきなく交われるというチャンスがきっかけで、だんだんコミュニティに、はいつていくことが、できるようになるんですね。

前川 ひとりで、できるものですね。

内村 自分で楽しむのだけれども、同じ仲間があると、それで他人に心が許せるようになる。ですから、東さんがいわれたようなスポーツに、もっていきにしても、そのもっていき方を考慮して、なんでもかんでも、これをやれというんでなくて、その人の傾向に合うスポーツを上手に——自然にいくんでしょうけれども、もっていきことで、ずいぶん救われる人が、僕はあると思いますね。

東 僕は、小学校・中学校の体育のやり方が、だれでもが楽しめる
霧田気

初めから、むずかしいものをやらせて、できるものはドンドンやっていく。できないものは、だんだん離れていく。義務教育の体育というのは、そういうものじゃなくて、レクリエーションという配慮を十分もって、みんなのできるように、その場をつくっていかなくちゃいかんと思います。

小野 授業内容の工夫だと思いますが、体操などはとくにできる、できないが、はっきりする種目ですから、その器械になれるための遊びの段階を、ドイツの例などを見習う必要があると思います。とても楽しい遊びが研究されていますから……。

小川 内村先生がおっしゃったように、プライドを傷つけられまいとすると、自分に自信がないためにしりごみして、結局、固い殻にとじこまることになっていくんじゃないかと思うんです。だから指導の方法としては、へたな者同志で楽しめるような霧田気をつくってやるのが、大事じゃないでしょうか。

日笠 そして勝ったり負けたりすれば、そこで興味がでてきて、楽しみ

になるということです。

小川 そうなんです。職場の運動部にしても、地域にしても、終戦直後は、ほんとうにみんな一緒にやったものですがだんだん選手制度が重んぜられるようになりまして、非常にすばらしい技術をもった者がやっている、結局、自信のない者は、まずい技術を見られるのが、はずかしくなっていて、だんだん見る側にまわってしまうわけですね。

そうすると、いわゆる底辺というのが、だんだん開拓されなくなって、自分でやるより見るほうが……という問題の傾向になってきたんじゃないかと思うんですがね。

前川 学校の体育あたりで、スポーツぎらい、運動ぎらいになってくるのを調べてみますと、まずくいったときに、人にかかられるとか、ちょっと、からだの形が変だとさげすまれるとか、こういうことがあります。折角やろうとしても、出ばなをくじかれた格好で、だんだんやるのが嫌になってくる。そのうち、みんなとズレがでてくる。こういうのが、ずいぶん多いと思うんです。

小川 そこで私は、みんな共通になんでもまず趣味をもつことから一緒にやるんでなしに、さきほど内村先生がおっしゃいましたように、それぞれ趣味をमतしてやる必要があると思うんです。

趣味といっても、個人的な趣味と集団的なものとあると思うんです。たとえば読書でも、みんな一緒に読むのもありますし、自分自身で、心ゆくばかり本を読みたいというものもある。同じように歌にしても、合唱もありますし、ひとりで歌いたい、あるいは師匠につきたいんだというものもあるでしょう。庭いじりなんか、ちっとも、ほかの人に左右されないで、やっていけますし、釣りの話もできましたけれども、そういう個人的なものもたくさんあります。

しかしながら、できれば集団的な、みんないっしょに楽しむような趣味

をもつことの方が、理想ではないでしょうか。というのは、われわれは社会生活をしなければならぬだけに、いろいろの面で好都合だと思うんです。ただその問題については、教育の問題として、「君はへたなんだ」というようなやり方で、片づけられては大変で、下手は下手同志で楽しむ方法の指導が必要だと思います。

日笠 そういうものを指導していく役割と
子供の意欲を受けとめる といいますか、家庭・学校あるいは地域社会、
いろいろございますが、そんなような点はい
かがでございましょうか。

前川 子どもが、もう一人立ちができて、友達をみつけたり、あるいは自分自身でやっていくようになると、この段階では、家庭での指導は、なかなかむずかしいと思うんです。むしろ、もっと小さい段階で、おかあさんと一緒、あるいはおとうさんがそこへ、はいてやっていくと、少々ま
ずくても、大抵はちゃんと受け入れられてきます。これは運動に限らず、他のいろんなことについても同じことが言えると思うんです。

ところが、それらのものを家庭では、なかなかやれないような事情がある。これは、あとで問題になると思うんですが、場所的な問題や何かで
てきましょう。しかし、できるだけ家庭で、子どもたちの表現意欲といま
しょうか、こういったものを受けとめてやるのが、両親の勤めじゃない
か。そうすると、あんがい気楽に表現できて、自分が満足のいく状態に
なるんじゃないかという感じがしますがね。

日笠 スポーツなんかでも、小さい子どもの場合に
アドベンチャープレイグラウンド
冒険公園 は、比較的、家庭で見てもやれますけれども、少し大き
くなりまして、スポーツの種類もいろいろになってき
ますと、家庭では、はたしてうちの子どもに、これをやらしていいんだろ
うかというような心配がでてくると思うんです。そのへんはどういうふう
に……。

前川 それは学校へいくような段階ですね。

日笠 ええ。たとえば登山なんか、出していいかどうかというようなことが、よく家庭で問題になっているようですが……。

前川 その点、今の日本のおかあさんたちは、少し心配性であり過ぎるという気がしますね。これをやったら、怪我するんじゃないかとか……。

むしろいろんな計画については、どうやっているのかということ、十分確かめてやるし、受けとめてやる。あとはできるだけ、「よし、いいだろう」というような家庭での仕向け方というのは、どんなものですかね。余りこれもやっちゃいけない、あれもやっちゃいけない、ということになり過ぎると、子どもたちは困ってくるんじゃないでしょうか。

小野 その心配性について、どうしてお母さんたちが心配し過ぎるかを、男性のかたがたが、理解させて下さるといいと思うんです。女は、女の遊びしか、幼いころの記憶がありませんし、とくに現在、中・高校に子どもを通わせているような年輩のお母さんがたの幼い頃には、現在と比べて、教育方針も内容も大変遅れていたのです。そして文化・学問の進歩が、大切な肉体訓練——幼児期の木登りとか、人間生まれつきの本能を封じてさえいるのです。何でも教育々々といって、はびこらせているのは、男性の側にも責任があると思います……。

小川 日本では、あれをやっちゃいかん、これをやっちゃいかんというのが、多すぎるんじゃないでしょうか。

私はイギリスのアドベンチャー・プレイ・グラウンド（冒険公園）を見たんですが、子どもたちが、実に乱暴な遊びをしているんですね。ちょうど夏休みでしたが、300坪位のところで、子どもたちがとりでを造り、あるいは高い平均台にのり、滑り台も広い滑り台で、滑ってくるのを下で邪魔したりして、非常に乱暴なことをしている。しかし、そこには6人の指導者、これは大学生のアルバイトですけれども、彼らも子どもと一緒に遊んで、相当な人数の子どもたちが、ほんとうに泥んこになって楽し

んでおりましたがね。

ああいうふうに、たくさんの指導者をつけて、怪我させない配慮をしながら、子どもたちの個性を生かしたり、創造力をたくましくしたり、子どもらしい乱暴な遊びを、指導したほうがいいんじゃないかという感じがするんです。日本じゃおっかなびっくりで、何しちゃいかん、かにしちゃいかん、そうすると子どもたちが、かえってかげに隠れてやろうとする傾向に、なってくるんじゃないかと思うんです。

東 日本は、社会体育というものの指導者が、
社会体育ということ 非常に足りないんですよ。社会体育というのはスポーツの指導もあるだろうけれども、小さな子ども、あるいは主婦なんかのレクリエーションの指導ができなっちゃいかん。そういう指導者を養成することが、今いちばん大事な問題で、国でも言われていることですから、これを具体的に早急に、つくる必要があります。この指導者がいないことと場がないこと、この二つがいまの隘路ですね。

小川 私は環境というものが、その人の考え方を
環境が人をつくる 変えていくと思うんです。たとえばユースホステルという協会がありますね。あれは現在、40万人ぐらいの会員がおるわけですが、私は文部省におったとき、会員である青少年が、どういう気持ちでユースホステル協会に、はいるかというのを調査したことがあります。そのころは、まだ会員は15万人ぐらいでしたが、学生たち、あるいは青年たちがはいる動機としては、安旅行するという非常に打算的な考え方ですよ。安旅行して見知らぬところへいけるといことで、はいる人が多かった。

ところが、会員になってホステルへいけば、来たときよりもきれいにとか、セルフ・サービスだとか、友情だとかいろいろなことを具体的に、動作を通じて教えられますね。そうすると、それがだんだんと身についてく

る。

だから、私は環境というもの——環境のなかに指導者も含み、建物もあるでしょうが、それが彼らに生きた教育をしていると思うんですよ。しかし現代の社会では、そういう世話をするものが少ないし、また、自分のものは大事にするけれども、人のものは粗末にするというような考え方で、公德心がないと言われるように、なってきたんじゃないかと思うんです。

前川 私は、人のためにやっているんだ、学校のためにやっているんだという立場と、そんなものじゃなしに、自分自身のためにやっているんだ、という二つの考え方があって、自分のためにやるときには、ボールも磨くしラインもひくだろう。ところが、人のためにやっているんだということになれば、それじゃラインは、誰かがひくのが当たり前だ、ボールも誰かが磨くのが当たり前だということになる。

レクリエーションとして考える場合に、どうも人のためにやらされているんだという気持ちが強くて、自分たちをどうするか、自分たちをかわいがるということが、案外、出ておらないんじゃないか、という感じがするんですがね。

日笠 それから、こういうことはないんでしょ

スポーツマンの人柄 うか。私は選手として、スポーツをやったことは全然なくて、むしろレクリエーションとして楽しむ、そのかわり、なんでも手を出すほうなんですけれども、本当にスポーツをやっている方を見ますと、なんか違うという感じがしますね。

小野 無理をしているようにですか。

日笠 いや、そうじゃなくて、非常に人間的に明るい感じの人が、多いんじゃないですか。私、そういう印象を受けますね。それから、余り細かいことにこだわらないような感じを受けます。むずかしく言うとスポ

ーツと人間形成の関係ということになりましょうが、何かお気づきのことはございますか。これは私だけの感じかもしれないんですが……。

小川 全体的に、確かにそういう傾向はありますね。しかし、それがどうなんですか。解明したことがないので、ちょっと……。

前川 小野さんあたり、一緒にやっている仲間をごらんになって、どう？

小野 レクリエーションですと、いわゆる勝った負けたという、いちおうの目標をおいてやっても、それがたいへん気持ちよく終われるというか、負けた場合でも、それほど悲観することなく、前川先生がおっしゃったように、生活の上でのレクリエーションだという立場でやりますから……。

ただ、競技者としてやった場合には、真剣度が違ってきますね。それと、真剣勝負といいますか、からだをぶっつけあう、あるいは、むき出しの闘争心をぶっつけあうものですから、そこにレクリエーションとは違った、たいへん厳しいものがあるわけです。逆にそういう意味で、さっぱりしちゃう——と言うとおかしいんですけども、その場ですべて発散しちゃうということは、日常において案外あります。

日笠 そういうことを、やっていらっしゃるから、一般の人とつきあうときには、非常に寛大な面もある……。

小野 はい。そうだと思います。

日笠 小野さんは、ご夫妻で体操をやった「へたの横好き」でも結構 いていらっしゃるし、いろんな方を指導しておられる。その場合に今のような形で選手に向いた人と、一生懸命やっているけれどもそうでない人と、これはわかりますか。

小野 ええ。それはもう、すぐわかります。

日笠 どういうところが違いますか。

小野 やはり素質ですね。でも、素質があっても、この人は選手としては駄目だ、という人もあるんです。

日笠 それは精神的なものですか。

小野 はい、そうです。感覚的なもの、筋力的なもの、すべて総合した面で、いくら良くても、精神的なバランスがとれなく、大会のたびに失敗を重ねる人もおります。また運動能力の面で、努力しても、牛肉の看板みたいに、ぜんぜん筋肉がついてこないという人があります（笑声）。

しかし、ふしぎとそういう子は、気持ちがいいんですね。それで人の世話をしたり、マネジメントをするような……。

日笠 好きなんですね。

小野 そういう人こそ、レクリエーションとして、末長く楽しんでいけるような気がするんです。かえって競技者というのは、やるときはパッとやって、終わるとスカッと身をひいちゃうというような、極端になり易いもんですけれども、本当の味もっている人というのは、あんがい前者に多いんじゃないかと思えます。

前川 日本の言葉に「へたの横好き」というのがありますね。反面、「好きこそ、ものの上手なれ」というのもありますけれども、私は、へたの横好きというのも、たくさんつくりたいと思うんですよ。

60歳になっても平均台の上を歩く

小野 私たち、ドイツなんかには遠征にいきますと、観客が違うんですね。日本でしたら小学生が見にきますけれども、それも半ば強

制的に、学校単位で見に来てくれるわけです。

ところがヨーロッパでは、場所を間違えたんじゃないかと思うような、ミンクのコートを着た女性が、ご夫妻でずっといらっしゃる。演技中に「ウン」なんて声を出そうものなら、恥ずかしいくらい静粛なんです。そういう人は、ただ単に鑑賞にくるんじゃないくて、自分たちが、体操とかその他のクラブ員であるわけですね。いろんなクラブに所属していますから……。

そうすると、50才60才の1メートルも胸囲のあるおばさんが、「あなたの演技は、たいへんすばらしい」という賛辞の前に、「私も平均台をしたことがある」ということばをつけて、握手にくるんです。

日本でもそういうふうに、健康をかねながら、レクリエーションとして、60歳になっても、平均台を歩いているといった人がいるようになれば、体操の競技のほうも育ちますし、レクリエーションとしても、理想的なんじゃないかと思えますけれど……。

IV レクリエーションの場と施設

日笠 いろんなお話がでしたが、さっきちょっと、自然に親しむと、自然の問題ができましたね。自然とレクリエーションというようなことで、何かお話していただきたいんですが……。

小川 私は、東京から、だんだん緑がなくなるのを、非常に慨嘆している1人ですが、アメリカなんか、機械文明によって、ノイローゼ患者が多くなるというんで、大統領の諮問機関である野外レクリエーション諮問評議会が建議や答申しているんですが、結論を申せば、現代のアメリカ人の生活では、小手先のレクリエーションじゃ、とても追いつかないというんですね。レジャーにはすべからく、自然の中で生活すべきだといっている。そして実際に、キャンプだとか、ケネディ大統領が歩け歩け運動をさかんにやるとか、とにかく自然に親しむ運動をやっているわけです。それと同時に、自然を非常に愛護してますね。

ところが日本は、野外活動的なものは、国で奨励していますけれども、野放し奨励の形でしょう。指導者の養成も少ないし、そしてまた、レジャーを食いものにする観光開発が野放状態で、ドンドン山の中に都会をつくらせて、自然を破壊しているんですね。これはアメリカなんかと、全く逆の考え方じゃないか。ネコのひたいのような日本の、その自然をみんな壊していくんだから……。

ヨーロッパでは、町をつくるのに、町のまんなかに、森をつくったりしますけれども、日本は、あすこに森があるから、ぶっこわして家でもつく

れという式で、全く逆の考え方ですね。こういうところは、もう少し、日本は考えなきゃいかんじゃないか、という気がするんです。

結局、人間疎外の悪条件が、社会にいっぱいありますからね。それから逃避して、本当に人間らしい生活をしようと思ったら、自然の中の生活ということになるんで、自然というのは、人間らしい生活をするためには、非常に大事な環境じゃないかと思うんです。

日笠 日本の場合、とくに大都市がひどいですね。

子供たちをのびのび遊ばせる 小野 このごろ幼稚園でも、平均台とか跳び箱がありますが、それが木の匂いを全部消しちゃうように、ペンキで真赤に塗ったりして、色彩がケ

バケバしいんです。これは木でできているんだということを、もうちょっと味あわせるようにしたらと思いますけどね。

小川 ペンキで隠してしまってね。

小野 まったく逆行のものを、ドンドン置いていくような気がするんです。

小川 ドイツの子どもの遊び場を見ると、ぜんぜん逆ですね。

小野 はあ。木を倒したまままで、置いてあるとか……。

小川 私はハノーバーで見たんですけども、爆撃のあとの凹地を池にして、そこにボートを浮かべたり、そのそばの土盛りしたところは、皮をはいた丸木で段々の登り段をしてあるだけなんです。そこを子どもたちが、登ったり降りたりして遊んでいる。皮をむいただけの木ですから、もうテカテカ光っているんですね。だからあんまり金もかけないし、そういう中で、子どもたちが、のびのび遊んでいるということが、大事なことじゃないかと思うんですね。

日笠 子どもの生活というのも、自然との接触が非常に少なくなって、トンボを見たことのない子どもとか、そういうのが、たくさんおられますね。

児童公園というと、固定的な考えで、滑り台があって、ジャングルジムがあって、ブランコがあって、砂場があって、それだけそろえば児童公園である。子どもの創造力を伸ばすという意味では、むしろなんにもなくて、雑草が生えているほうが、まだいいと思うんですがね。

小野 あれは逆に、破壊能力がつくんですよ。つくろうとしない。アパートなんかに住んでますと、きちっとしたものを与えますでしょう。すべて壊すことに、子どもが関心をもつ。まあその早いこと、大へんなもんですね（笑声）。かえて考え方が、逆になっていると思うんです。

日笠 子どもの遊び場は、どこも広さが不足していて、施設過剰という感じがしますね。それも、おとなの頭で考えた施設が多いんですね。

小野 何かを滑り台にして遊ぶんじゃなくて、滑り台をなんとか壊してやろうという感じが、見ていると大へん強いんです。

前川 小野さんは、子どもを育てていらっしゃる時、どうしていられるのですか？ 私は、子どもにおもちゃをいっぺんも買ってやったことはないんです。時代の違いかもしれませんが、なんでも、あるものは全ておもちゃなんだ。木ぎれがあれば、それが彼らにとってのおもちゃだ。石ころがあれば、それがおもちゃだという考えで、家の中でも外でも、おもちゃを全然与えない。それで、子どもたちが育たないかという、そうではないような気がするんですね。

小野 私も、余りおもちゃは買わない主義なんです。でも、全然というわけじゃなくて積み木とか、最低のものは買いますけれども、そのかわり食事のテーブルなんか、ご飯がすんだら「ハイ、解放」といって子どもに渡しますと、上がったたり下りたり、反対にして中へは行って、「ヤキイモ」って行って引っぱったり……（笑声）。

結局、創造力がつくといったら、からだでやることですね。おもちゃの自動車で、ウーウーなんてやってみたって、頭の中には、ちっとも影響ないんじゃないかと思います。それはもう、痛感してますね。あんまり恵ま

れ過ぎているってことが、いけないのかもしれませんが。

日笠 近頃のおもちゃというのは、細かくできていますから、壊したら、それでおしまいというのが、多いですな。

小川 日本の子どもの遊び場の共通点は、完全にできあがっているから、利用されないんです。

日笠 子どもがやることは、なんにもないんですね。丸太ん棒をころがして置いたほうが、はるかに、いろいろ遊べるんですけども……。

小川 しいて言えば、砂場がいちばんいい遊び場でしょな。

前川 なんで、過密都市をますます過密化しよう

日光と緑と空気 としているんですかね。こちらでひとつ、過密都市の対策があっていいだろう。その点で私は、第一生命が大井町（神奈川県）のほうに引越されるあの勇気を、もう少しみんな、見習う必要があるんじゃないかと思うのです。

日笠 あれは理事長の持論で、日光と緑と空気、これが豊富にないところは、人間の住むところじゃない……。

小川 全くそのとおりですね。

前川 こんなことは、できるかできんか、わかりませんけれども、たとえば15階のビルができたなら、その何分の一かにあたる土地は、必ず公共の土地として供出するんだ。そういったようなことをやらなければ、絶対できませんよね。

たとえば道路と公園と合わせて、アメリカあたりは、全都市の30%位でしょう。日本の場合は8～9%、こういうところで生活していきなさいと言っても、無理じゃないかと思うんです。今のところ、ギャアギャア人間が集まって、なんとかやっておりますけれども……。そこでやっぱり、さっきの自然へ、という気持ちが出てくる。

小川 東京の建物は、平均すると1.7階だそうですね。2階にもならないというんでしょう。そして50坪買っては、マッチ箱みたいな家を造ると

いうことで、その狭い土地が不経済に使われている。

私は、パリ郊外のシャトーという町で、びっくりしたんですけれども、1万8千人ぐらいの人口の、本当のいなか町なんですよ。そこでビルをたくさん造っているから、なにするんだと聞いたら、アパートだと言うんでしょう。そんなに人間がふえるのかと言ったら、いや、むこうの平家をぶっこわして、そこを人間を全部こっちへ入れる。その平屋の跡は、公園と子どもの遊び場にするんだ……。まわりは全部、農地です。農地は絶対つぶさない。そして都市を立体化している。そして公園をつくる、子どもの遊び場をつくるという……。公の施設をつくるわけですね。公のためには、個人の所有権の発動すら、ある程度制限している。

日本なんか、そんなことやると、憲法無視だと騒ぐでしょうが、考え方が違うんですね。東京なんか、都市計画はお手上げとか、都市計画不在とか、悪口言われてますけれども、なんとかしなきゃ、大変なことになるでしょうな。

日笠 いろんな施設を国際的に比べますと、芝生に入るべからず？ 日本がいちばん遅れているのは、住宅と下水と公園ですね。この三つは、けたはずれに遅れています。

前川 その公園が、このごろは、だいぶ違いましたけれども、だいたいが観賞公園です。お年寄り向きの公園になっている。若い連中が遊んだりする施設は、今までは非常に少なかった。京都へいくと、その典型的なものがありますけれどもね。

小川 芝生でも、向うではひなたぼっこしたり、マリ投げしたりして、使っているんですけれども、日本は「はいるべからず」……（笑声）。まあ実際問題として、これだけの人間がはいれば、芝生もなくなってしまいかもわかりませんがね。

日笠 確かに人が多すぎることですな。

小野 札幌の大通り公園、あれはいいですね。みなさん芝生の上に坐って、トウモロコシかじりながら、クラス会の延長みたいなのをしていたり、若い人のグループから家庭グループまでいろいろあって、大変うらやましいと思いました。

日笠 はじめから計画的にやれば、できるんですからね。

小川 都市計画にしても、えらい人は外国へ行って見てくる機会があるでしょうけれども、私は、実際に計画する人が、なんとかして外国の都市計画、あるいは、できあがったものを見てきて、そして、さて自分の町は、これからどういうふうにするかを考える視野を広くする機会を、つくってやる必要があるんじゃないかと思うんですがね。

日笠 これで今レジャーというと、乗り人の行かないところを選ぶものに乗って、ほとんど観光地へ出ますでしょう。ところが、いった先はイモ洗うようで……（笑声）。

小川 交通戦争でね。私は、これからは与えられたところで楽しまなきゃならないようになるでしょうから、何よりもアイデアが必要だと思うんです。自分の工夫によって、少しでも楽しい方法を考えなきゃいかん。

だから私は、土曜日曜ばかりを休みにしないで、職種によってはウィーク・デーに休みをとって、人のいかないときをねらうとか、あるいは1日といえば、朝早く行って2時か3時ごろに帰ってくる。人のいないときと、ところを選ぶということを、考えなきゃいかんじゃないか、という気がするんです。まあ、そういうと、商売ができないという人がおりますが。

しかし、たとえばデパートのように、月曜日あるいは木曜日に休むというところもあるんだから、案ずるよりやってみることが、そういうものを解決していくもとなるんじゃないか、と思うんですがね。土曜、日曜に遊びに出たって、人ごみでへとへとに疲れて帰ってくるのが関の山ですものね。

日笠 その点で、これは私、しょっちゅう考えるんですけども、いくところが固定されてまして、きまった観光地でなければ、レクリエーションにならんようなつもりでいるのが、人の混む大きな理由じゃないんですか。そうでなく、なんでもいいから、いなかへ行って——これはみなさん、車で走ってみるとお感じになると思うんですが、いなかへ行くと、人がとっても少ない。東京近辺はたくさんいますけれども、いなかへ行ったら、10分ぐらい人の顔見ないで、走れるようなところがありますね。そう遠くないところで。べつに有名なところでなくても、そこいらへ、子どもを連れて行って、適当に遊んでくれば、ドリームランドへ行ったり何かするより、よっぽどプラスになると思うんですが、どうですか。

小川 私もそれは大賛成なんです。だから、どこか自然の中へいこうというときには、まず観光案内などをみて、それにでかでか説明しているところは、みな失格にしてしまって、案内書にのっていないところを選びなさい、そうすれば、あまり人が集まらなくて、ゆっくりたのしんでこれるというんですが……。

日笠 温泉がなくてもいいし、特別、景色がきれいでなくてもいいと思うんです。

前川 そのとおりですね。私は低山趣味なんです。人のいかない低い山ですね。これだったら、手ごろなんです。汽車から降りて、そこをずっと歩いて、それからまた汽車に乗って帰る。これは割合、気楽にできるんですよ。

もう一つは河川の周辺とか、あるいは、ちょっと離れたところに、歩ける個所がたくさんあります。そういう細い道を、なんとなしに歩いてみたりする。こういうことのほうが、いいんだという考えになると、ずいぶんたくさんある。その場合に、農作物をいためつけたりなどしないこと、これだけは重要ですがね。外へ出るんだったら、人がウヨウヨしているところへは行かない。川べりでも海辺でも人のあまり集らないところで、よい

ところがあんがいありますよ。

日笠 日本の自然というのは、いたるところに美しい景色がございますからね。

**レクリエーションに
創意を** **前川** 日本人は流行に弱い。ですから人がいくんだというと、それを追っかけていかないと、時代遅れのように感じるんだけれども、少しつむじ曲りがたくさんでできたほうが、いいんじゃないか、という気がするんですよ。

日笠 流行の追い方が間違いじみていて、それスキーだということ、本当に間違いざたですね。われわれ、昔やったこともあるけれども、あんなところへ、とてもいく気にならない。

前川 そういう場所の選び方とか、レクリエーションそのものについても、もうちょっと、工夫が必要だという感じがしますね。

小川 レクリエーションというものは、非常に創意工夫が必要だと思うんですよ。つまらんもんでも、工夫のしようによっちゃ、楽しめるんですからね。

前川 私は職場での仕事がありますが、うちでは、狭い庭を1時間ぐらいかかって、掃除するんです。葉っぱを拾ったり、ときには庭木にちょっと手を入れたり、そんなので1時間から1時間半すごす。そのときは職業柄、学生問題も忘れれば（笑声）学校問題も、いっさいがっさい、忘れてしまう。そういう気持ちになれば、それこそ本当の気分転換で、どこでもできるんだ、そういう感じがしますね。

日笠 レクリエーションは、創意を持ってということですね。

前川 それが今、いっそう必要なんじゃないですか。

小川 それが本当のリ・クリエート（re-create）ですね。

日笠 いま先生がおっしゃったのは、私も前に、よくやったことがあるんですよ。家族連れで5万分の1の地図を持ちまして、中央線の上野原で

も、どこでもいいから降りるんです。そして地図を見て、むこうの山を適当に歩いてもどれば、どっかにまた駅がありますから、そこから乗って帰ってくる。予定もなんにもない。それでも結構、腰かけて、弁当食べるようなところがあるし、いき違う人なんていうのは、お百姓ばかりですよ。そういうふうなことをやれば、あっちこっち、そう混まなくて済むだろうと思うんですがね。

前川 なんかデラックスなこと、旅行でもすばらしい旅館に泊まらなきゃ、レクリエーションじゃないんだ、こういう考え方を変えていく必要がありますね。

小さいときから
自然の中で
小野 それはやっぱり、親からじゃないでしょうか。外国の場合、小さいときから、そういう環境に育つわけですね。スポーツでも、小さいときからプールに投げこまれて、知らないうちに泳げるようになるとか……。

そういうのは、卵とニワトリじゃないですけれども、親のほうに、早くレクリエーションを理解させて、子どもを小さいときから教育する。その子が大きくなったときは、なんら抵抗なく、さきほどお話あった中央線の途中で降りて歩く楽しみを、味わうようになると思うんです。まず親の頭の改革が必要です。

小川 たしかにニワトリと卵の関係で、どっちが先か、わからんような気がしますがそれでもね。

前川 私の小さいときは、育ったところが漁村でもあり、農村でもあり、山村でもあるというところでしたから、学校から帰るとたいてい山へ行って、秋ならキノコをとるとか、春になれば春らしく、いろんなところへ出かけていく。こういう工夫ってものが、小さいときからできてますから……。

小野 生活のなかへ、はいていたわけですね。

前川 ですからあんがい気楽に、自分のイメージに合うようなところ

が探せるわけです。ところが今の、とくに都会育ちの人たちは、そういうイメージをもてといっても、無理じゃないかと思う。

**団地に欲しい十分な
施設**

東 僕が前から感じているのは、ほうぼうに団地ができますね。あれを見ると、家をダーッと建てて、そこにレクリエーションの施設がほとんどないんですよ。砂場かなんか、ちょっと作ってあるだけで……。そこには誰もいない。そして子どもが、ちょっと何かやっていると叱られるから、やらなくなる。

私は団地をつくるなら、そこに総合病院、とくに小児科・産婦人科に重点をおいた総合病院と、それから体育館・広場、こういうものをつくって管理者・指導者を置く。そしてその団地全体を中心として、家庭生活にうるおいをもたらす。そういう計画をしなければ、嘘じゃないかということ、この間住宅公団の人に話したんですけれどもね。

小川 必要ですね。

日笠 今は小さな子どもの遊び場を、よう開放したい放課後の校庭 やくつくっているという段階で、少し大きくなると、どこでキャッチボールしていいのか、そういう場所がない。

前川 東京では、本当に困りますね。いろんなところで、子どもにじかに会って運動をやるのに、どこでやるかということを知っていると、やっぱり、やる場所がないんです。とくに密集地帯では非常に困る。そこで一体、どこですればいいのか、これは報告にも、ちょっと書いておきましたが、実際上学校は先生の都合がありますから、4時半になるとみんな追い出される。冬場はだめでしょうが、そのほかの時期には、もう少し学校に残したいと思っています。私ども子どもの時分には、暗くなるまで学校で遊んだ。場所としては、学校はいい場所だったんですが、今はそうはいかない。地域に帰って、どこか遊ぶ場所があるかということ、それもな

い。むしろおかあさんが、いちばん期待しているのは、勉強好きの子どもになってくれたら、ということなんです（笑声）。その勉強も、おかあさんがくっついていて、否でも応でも、とにかくやらせるんだ、ということになってしまってますからね。

内村 私、子どもに校庭をもっと使わせるために、学校の先生のほかに、特別に1人ぐらい監督の人がいて（笑声）、それこそPTAで少し費用をだして遊び場をもう少し使わせるよりほかないんじゃないか、今のところ、それ以外に場所がないですからね。

また一方においちゃ、教育ママなんていう考え方を、少し変えないといけませんね。子どもの精神衛生のうえで、子どもを庇護しすぎることの弊害が、われわれの方で、いま非常に大きな問題になっているのです。庇護しすぎるために、子どもが健全な発育をしないというわけですね。日本の場合、入学試験の問題もあるでしょうけれども、もう少しおかあさんの気持ちを変えて、学校の遊び場を、もっと自由に利用できないか。僕は非常に惜しい気がしますね。それ以外に遊び場が、ドンドンできる時世ならいいけれども、ほとんどないんですから。

小川 ただ先生、学校施設の開放ということは、昭
使う側の公德心 和24年の社会教育法でも、あるいはその後、できたスポーツ振興法でも、強くうたっているわけなんです。それで東京都内でも、中野区の小・中学校は全部開放していますし、そのほかにも若干あります。地方にも若干あります。しかし全般的には、まだまだの感ですね。

これは、学校の先生の理解ということも大事でしょうが、私は結局、使う側の公德心の問題といえますか、使いっぱなし、荒らっぱなしでは、学校の校長さんをはじめ教員のほうは、好意的に開放しても、それじゃ困る。火事でもでたら、誰が責任をとるかという、現在の制度では、校長さんが責任とらなきゃいかんですから、野放しでお人よしの、結構でござ

ざいますというわけにいかない。やっぱり使う側でも、相当責任をもってやらなきゃいかんと思うんです。

私は、ドイツに行った時、晩に学校を回って見ましたが、実によく使っているんですね。60歳以上のじいさんがたの、下手なバレーボールだとか、フェンシングだとか、あるいは40歳以上のでぶでぶしたおかみさんがたの健康体操なんか、やっておりました。私は、最後はどういうふうにして終わるのかと思って、9時10時ごろまで見ていましたら、終わったあと全員で掃除するんです。そしてきれいにして、ちゃんと戸締まりをして、見回ってから帰る。これを全員がやっている風景を見まして、日本人も、ああいうところまでいかなければ、学校の施設が、本当に生かされないんじゃないか、という感じがしましたね。

日笠 いまのお話は管理の問題があって、なか管理に一段の工夫を なか校庭を開放できない面がある、ということですが、中野区の場合、そういう面では、何かうまい工夫をされているわけですか。

小川 これは、あすこの教育長も区長もスポーツに熱心な方で、とにかく遊び場がないから開放しようというムードと、それと文部省のスポーツ教室奨励も手伝って、夜間、勤労者のために提供するというので、やっておるんだろうと思うんですがね。だから管理は、そのグループのなかにリーダーがおって、その人が、最後に後始末まで責任をもつ。学校の宿直の先生もおられますけれども、グループのリーダーが、表に出てやっておるようです。

前川 管理の問題で、市川市の菅野という小学校では、夜間はおとなたちが使いますが、明るい間、したがって日曜日も、子どもたちに使わせて、その管理は、PTAが代る代るやっているわけです。使い方からすれば、子どもたちは、それほどむちゃなことはやらない。

いま小川先生からでた問題は、学校の子どもじゃなくて、むしろ地域の

青年とか、その他、未組織の集団による使い方だろうと思うんです。だから学校の子どもに対する管理は、PTAあるいは学校の教師でよいが、そうじゃない場合は、かなり厳格な管理方式を考えていかなきゃいけない、という感じがいたしますね。

東 学校開放問題は、根本的に不可能な問題じゃないんだな。管理をどうするかという方法ですね。それによって解決つけられると、僕は思っている。大田区でも、さかんに開放しろとあって、だんだんに、やってきていますけれどもね。

内村 施設の上からいえば、いちばん手近な問題でしょう。体育館とかなんとかいう問題じゃないですからね。

東 それを半分遊ばしておく必要は、全然ないと思いますね。

日笠 都市計画のほうも、小学校を中心とし
校区はコミュニティ
の単位
て、校区を住宅地の単位とする考え方がありますが、とくにスポーツなどについては、公園と校庭
というものは、同じような機能をはたす場合がありますからね。

小川 熊本県では、スポーツの振興は学校を中心にして、校区制になっているわけです。だから国民体育大会で表彰されたなかに、校区というのがありましたよ。学校はなんといっても、いろんな施設の中心ですから……。

それから、地域で私が関心をもっているのは、ちょっとむずかしいが道路を遮断して子どもの遊び場にするということですがね。裏通りを日曜日、午前に2時間とか午後何時間というふうに、一定の時間を定めて、交通を遮断して、子どもの遊び場にする。これは中野区ではこの前、大和町でPTAのおかあさんたちが、中心になってやったんです。杉並区内でも、前にやりましたが、私は野方警察署の交通課長さんに会いまして、

「新聞で見たんだけど、いいことだと思うから、あっちこっちでぜひやってもらいたい」

といったんです。そうしましたら、

「私どもも、非常にいいと思うんだけども、ただ一定の場所でやると、その道路に面しておる住宅が、非常に迷惑する」

という話で、一つの試験的なものだと言っておりました。私は場所を固定しないで、第1日曜日にAという場所でやったら、第2日曜日はBという別の場所にして、そこでおかあさんがたも立会って、子どもの遊びを指導するということが、できないものだろうかと思うんですよ。

これは、そんなことはできないという人があるし、また警察庁自身は、反対のようですが。アメリカのように、施設にめぐまれているところでさえ、若干そんな試みがなされているそうです。まして東京のように、施設のないところでは、苦肉の策としていろんな工夫をして、いろいろのものを使ってみなきゃいかんじゃないかという感じがするんですね。

V いいコミュニティをつくるために

地域社会の中の
体操グループ

日笠 小野さんは一般の方を集めて、体操をやって
いらっしゃる……。

小野 はい。池上でやっております。

日笠 そういうのをやっておいでになって、どういう方がきているのか、それからそれをやったことによって、人間関係がよくなるというようなことがございましたら……。

小野 内輪のことですけれども一応お話いたします。

日本の場合、クラブ制度がないものですから、学校の体育館も6時になりますと学生がいなくなって、先輩といいながらそれ以後の使用は邪魔になるわけです。

そこで、競技をすぐやめちゃって体を動かさないと具合が悪くなるので、わたしと主人とで何とかしてどこかたただで場所を提供していただけるところはないかと、練習する場所を探していたんです。幸い、実相寺というお寺の、ちょっとした講堂をお借りすることができたものですから、どうせ体を動かすのなら、精力をもてあましている子どもたちがあるだろうと思ひまして、子どもたちを集めてはじめたんです。

徐々に人数がふえまして、現在のところ、何百人という単位になりました。今では手が回らなくなって、出身校の教育大・日大・慶応その他いろいろな学校の体操グループの指導者を、アルバイトにお願いしましてやっております。その他レスリングは、笹原さんはじめメダリストの方々、それから重量挙げは一ノ関さん、そして競技者を育てるというんじゃないく

て、あくまでも体力づくりを中心として、楽しみながらやるということにしたわけです。

小野 実際やってみますと、ものすごく言
子供のしつけはきびしく 葉づかいの悪い子とか、掃除をしないで帰っ
ちゃう子とか、いろいろいるわけですが、し
つけの面を実相寺の住職の酒井さんという方が、やってくれまして、規則
を守れない子は、このクラブ員としての資格を持つことができない。そして
自分たちのものは、自分たちで大事にする。そういうことで運動してま
すと、おかあさんたちがおっしゃるには、日曜日の朝、体操にいくんだっ
ていうと、前の晩、枕もとにチャンとユニフォームとシューズをそろえて
置くんだそうです。それと体操で発散しますから、寝る時間が早くなる。
「成績が悪かったら、いかせないぞ」と言うもんですから、勉強と遊びの
規律が、よくなったらいいですね(笑声)。

それでおかあさんたちは、「厳しくしてくれてありがたい」とおっしゃ
る。それから、おとうさんが一緒にきて、親子でやっていらっしゃる方
は、子どもが風邪ひきで、だいふ学校を休んだらいいですね。

私のところは、完全な競技者にするんじゃないということを、うたいま
したもんですから、健康のためにというんで、来るようになって、それか
ら信じられないくらい休まなくなった。だから別に勉強しなくても、成績
が上がったそうです。さきほど言いましたように、けっして無理にするん
じゃなくて1週3回、1日1時間なんです。それで全然学校の違う子、年
の違う子が一緒になって、汗を流してやるわけですから、自分相応に苦し
ければ休んでもいいし、そういうような感じで、指導者はアルバイトの体
操部門の専門学生をつける。しつけの面は、酒井さんにやっていただく。
それからクラブ員をA・B・Cに分けまして、わざのいい者は、精神面で
も、みんなのお手本になるようにということで、その人たちがリーダーに
なってやっております。簡単にいえば、大体そういうことなんです。

設備もみんなの力を
出しあって

日笠 まことに失礼な質問なんですけれども、
経費がかかりますでしょう。それは、どうい
うふうに……。

小野 なにしる器具がなかったんです。レスリングで体協から、年間い
くらかで、マットを借りておりますので、それを体操のほうで使わしてい
ただいたり、それからトランポリンは、あれでだいぶ肺活量がつきますの
で、主人が預金をおろしまして、中古品を半値ぐらいで譲ってもらいまし
た。

日笠 いくら位するんですか。

小野 27万円ぐらいですね。だいぶ高いんです。それを15万円ぐらいに
値切って、協力してもらいまして、それから自分の持っていた鞍馬なんか
全部出しました。そして、できるだけ多く参加できるようにというので、
みんなからもらうのは、最初、週3回で1月300円ということで始めたん
ですけれども、指導者に払うお金とか、もっと器具が多くなければならな
いとか、いろんなことで、今は1月500円にしております。

本山の本門寺のほうで、たいへん喜んでくれて、無償で体育館を建てて
くださいましたので、おかげさまで、100坪のものですが、体育館もでき
ましたし、経費はアルバイトの学生さんにお払いすると、あとは器具を
一生懸命、購入して、施設の点で、完備していきたいというのが、私たち
の願いなんです。

日笠 非常に結構なことですね。小野さんご夫妻のような、いわば篤志
の方がやっておいでになるから、できるんだと思いますが、小川さんは、
ずいぶんあっちこっち見られて、そういう例は、ほかにもございませう
か。

小川 ないわけでもないんですけれども、
施設と指導者が足りない 少ないですね。私は、日本でスポーツを本当
にエンジョイして、生活に根を下させること

ができないのは、都会において、そういう施設がないからだと思うんです。やってみたいという人は、かなりあるんですね。総理府や日本体育協会で調べたスポーツ人口調査なんか見ましても、やりたいという人は、多いんだけど、施設がない、方法を知らない、指導者がいないということで、やらないのも多い。地域社会でいわゆる底辺をひろげるためには、ドイツにあるクラブ式のものが、あっちこちに必要じゃないかと思うんですね。ちょうど柔剣道の町道場が、あちこちにあるようにね。

日笠 いつかNHKテレビで、おかあさんがたが、日をきめて集まって、市の体育館か何かを使って、バレーボールやピンポンを非常に熱心にやっている。みんな、子ども連れでやってきて、ネットを張ったり、あとの掃除をしたり、というのを見ましたけれどもね。

小野 子どもさんがコーチになるんだそうです。球拾いをしたり……。

小川 公民館あたりで、そういうことに関心のある主事がおれば、やっている所があるんですよ。しかし、一般にはやっぱり施設もないし、指導者もない。公共施設のなかで、体育館なんか、1日何万円という貸し方をするでしょう。あれを今お話のように、月の会費が500円とか300円の会員制度にすればいいんですよ。

そして年間をとおしてまとめて貸すときと、クラブ員に提供するときと分ける。そういうやり方をすると、私は愛好者が、ウンとふえると思いますね。そして今一つ問題は、施設にはうるさい管理人はおっても、「おれについてこい」という指導者がいないことが、日本の施設が100%生きない理由じゃないかと思うんです。

**地域社会にクラブを
育てる**

前川 今うかがってあって、小野さんのような世界的名選手を指導者陣にそろえて、人が集まってくるというタイプと、それから、たとえば代々木の水泳場にいくつかのグループができておりますね。こういう、いわば決った施設があって、その施設を根拠地にして、クラブを育てていくとい

う場合。もう一つは、地域社会のほうで、クラブを実際に育てていくんだ、こういうものが類型的な考え方だろうと思うんです。

小野さんの場合には、若い人たちから言えば、非常に羨望のまとの人のところでやっていけるので、魅力的なんですね。それから、代々木の水泳場のようなものは、やっぱり古橋とかすぐれた指導者がそこにいて、しかも場所が魅力的である。

もう一つの場合は、とにかくやりたくて仕方がない。そこで適当な場所をつくって、クラブを発足させていくということなんですけれども、いずれにしても、クラブを育てていくのが先決問題だ。クラブ生活をやっていると、その活動が、自分の生活のなかに定着してくると思うんです。それがないと、レクリエーションだ、スポーツだといっても、容易に自分のものになってこないんじゃないか、という感じがしますがね。

日笠 コミュニティというのも、狭く解すると地域社会ですけれども、矢野理事長が考えておられるのは、もっと広くて、必ずしもその地域でなくても、志を同じくするものが集まれば、いいという考えなんですね。

前川 われわれが調査しましたのは、非常に欲求が強くて、技術水準の高いものは、多少は遠くても、村一つ離れたところでもやっていきますね。ところが、それほどでもないというものになると、そう遠いところへまで、でかけていく意欲はない。もっと手近なところがあれば、そこで何かしらやりましょう、ということになる。

もう一つ低い層になりますと、非常に近いところ、たとえば公民館の分館みたいなのところでもやっていく。こういう階層が、スポーツだけについても言えると思うんです。

だから矢野さんがおっしゃるように、広く考えたら、いろいろな層がある。その層にそれぞれマッチした施設、あるいは場所が本当に考えられる状態かどうか、という問題になってくるとは思いますかね。

たとえば、国立競技場というものを考えてみた場合に、東京都民が誰で

も、あすこをめがけて、いけるかといったら、ちょっと恥ずかしくて、いけないというのが大部分ですから、そういう人たちは国立競技場へいかないで、多少は粗末でもよいから、地域で遊べる場所を求めて、そこでやるということじゃないかと思うんです。

主婦も子どもも
サラリーマンも

日笠 テレビで中継してましたけれども、YWCA でしたか、母と子の泳ぐ会で、おかあさんと子どもと一緒に泳いでいるの、とてもほほえましいですね。かなりのお年の方もいるんです。「女学校時代に泳いだのが、忘れられなくて、いまでも泳いでます」といってましたが……。

前川 こんな例はたくさんありますが、一例をあげますと前橋の市営プールです。これは競泳用・中学生用・おかあさんと子どものためのもの・子どもだけのものと、いろいろの対象に応じて、プールがあるんですが、そのなかでいちばんよく使われるのは、競泳用じゃないプールですね。

とにかく水と一緒に遊ぶんだというタイプの人が多くて、しかもその施設は、独立採算がとれる位の人数をこなしている。毎日数千人を消化するというんです。

小川 国立第二競技場のプールなんか、オリンピックに使ったプールよりも、子どものプールが利用者でいっぱいなんですよ。子どもとおかあさんと、一緒に泳ぎましてね。そんなに深くないんです。あそこで、暑いのに、ずっと行列つくってはいる順番を待っておりますからね。

小野 池上でも、最初は子どもがやって、次には親もやって、いまサラリーマンの方がだいぶいらっしゃいます。結局、人間である限り、やってみると、やりたくなるんですね。

小川 日本人は、スポーツになじまない人が多いというけれども、あんがい食わず嫌いというんですか、そういう部類のものがあるんですね。だから、機会を与えてやれば、「いいなあ」といって、飛びついてくるんじゃないかと思うんです。YMCAの施設なんか、相当利用されているし、

国立競技場のトレーニング・センターもいっぱい、受付をストップしているんだそうですが、結局、いろんなことをやりたい、それが自分の健康になるということが、だんだん認識されてきている。だから私は、トレーニング・センターなんか考えて、中年以上の人に、健康を保証するような施設ができれば、相当はいるんじゃないかと思っているんですがね。

小野 お金が高いですね。

小川 高いんですよ。YMCAでも、中年以上の人を対象としたデラックス型は、入会金が5万円、会費が月2千円ですか。そのかわり、あなたの健康は保証してあげましょう、というわけです。それでも、相当集まっているそうです。

小野 ただ、広くみんなが親しむためには、絶対に安くないと……。

小川 一般の人には、安いのがあるんです。

小野 この前、ドイツの体操協会の会長さんが、**国や公共団体の援助が必要**としての代表でこられて、池上にもきたんですけども、池上では500円だといったら、それでも高いっておっしゃるんですね。ドイツでは、どれ位かと聞いたら、2～300円で、国の補助で、いろんな施設ができていたんだそうです。

小川 私はドイツで林間学校を見たんですけども、食費その他必要経費の3分の2は国がもっている。本人は3分の1だけなんです。だから安いもんです。それで朝昼晩と飯を食わして、泳がして、体操をやらして、おかあさんがたも一緒についてくるんですね。

小野 安くないと、広く一般の人々へは、ちょっと無理ですね、いまは。

日笠 日本では、ぜんぜん国の補助はないんですか。

小野 ないですね。

小川 人々の健康という問題に対する考え方が、ヨーロッパ人と日本人と違うんじゃないかと思うんです。むこうでは、健康というものを真剣に考えますよ。夏は、太陽をむさぼるように浴びますしね。本人が健康を考

えるだけでなしに、国なり地方公共団体が、健康を守るための施策を優先的にやるでしょう。日本では、各人も考えないし、国でも、まあまあということで、あんまり考えないというのが、実情じゃないかと思うんですがね。

日笠 いろいろ、たいへん面白い示唆に富んだお話が、でたわけですが、最後に、いいコミュニティをつくるということになりますと、いまお話にでたようなことを、どうやって推進していったらいいかという問題に、帰着するだろうと思うんです。

その場合に、家庭もございましょうし、学校というものもある。それから地域社会は、今までそういう組織も十分できていないし、推進運動も活発に動いているところは、非常に少ないということが、大きな問題であると思います。そういうようなことに関連しまして、これをどう進めていくかという問題について、ひとことずつ、お話しねがったらどうかと思うんです。

前川 私は報告にも書きましたように、家庭の力
これからの進め方 だけでは、なかなかできない。そうかといって、地域でも、非常に混みあう場所に手を出すのは、困難である。しかも地域社会で、何かやらなきゃならないということになったら、やはりレクリエーションの意義をみとめ、それに向って努力することが大切だろう。

たとえば、道路はみんなが通るんだからというので、一応つくられた。それから家も、ある程度まで考えた。ところがまだ、レクリエーションのところまで、意識が向っておらない。

そこでまず、コミュニティの行政機関が、このような意義に強くめざめてきて、みんなのためになるような事柄とか、生活の中身に、はいってくるといふようなものを、もっと考えないと、地域生活は豊かになってこないんだという感じがするんですがね。

そういうことで、一つは、どうしても場所を考える。その場所も、非常に多様な欲求に応え、その欲求に合わしていかなければならないので、一つだけつくればよろしいというのではこまる。

たとえば総合グラウンドをつくれれば、みんな使ってくれるんだという考え方ではまずいで、子どもは小さくとも子ども用の、青年には青年用の、老人には老人用と、それぞれ向きがありますから。それと、さきほど内村先生からお話のでた趣味のところまで、多面的に考えていくことが、必要じゃないかと思いますね。

東 レクリエーションの一つの方法として、スポーツを取りあげる場合、一番大切なことは、スポーツそのものの組み立てにこだわらないことだと思います。下手な人、初めての人でも、気軽に入れるような仕組みにして、段々とレベルを上げていくこと、このためにはどうしても、いい指導者といえますか、世話人を得ることが必要だと考えられます。

このようないいレクリエーション指導者が、現在の日本には、非常に少ないのではないのでしょうか。ですからいいレクリエーション活動を通じて、いいコミュニティをつくっていくとすれば、まずいいレクリエーション指導者を作ることが、先決問題だと思います。このためには、現在の教員養成機関のカリキュラムの中に、レクリエーション指導要領を体育指導要領と共に、もっと重点づけて設けることも、一つの方法だと思います。それと皆さんもおっしゃっているように、手軽な施設と場をもつことと思います。

**社会常識のレベルを
上げよう**

内村 私はレクリエーションやスポーツのもつ真の意味を、もっと社会全般が認識するように、国やマスコミなどに働きかけることも必要だと思いますね。

近頃は都会にも地方にも、ずいぶん施設ができたけれども、公共施設は少くて、多くは商業主義的なものです。だからお客さんが金を落してくれ

るようにという方針で、中にはどうかと思うようなものもある。またこれを利用する方も、お客さん意識が強く、他人に迷惑がかかるといった気持ち持ちはまだ少ない。

レクリエーションやスポーツは、自分の利益や楽しみのためのものだけでも、同時にコミュニティ意識を養成するのに、大切な場でもあるのだから、この辺の社会常識のレベルを、少しずつでも上げるようにすることが、前提条件のように思いますね。そのためにはマスコミなどの影響は大きいですからね。

小川 私は、これからの社会生活には、レジャーが非常に多くなる。したがってレジャーの活用ということが、大きな問題になってくると思うんです。そういう場合に、いままでのように、とにかく朝から晩まで、コツコツ働くのが善良な人間だという考え方でなしに、よく働き、よく楽しむという、人生を車にたとえるならば、勤労とレクリエーションが両輪のような考え方をもたなきゃいかんと思うんです。この点は、行政機関の指導というものが非常に大事だし、そして実際われわれが生活する場合に、家族ぐるみで楽しみをもつということ、その際には家族みんなで話しあって、楽しみを計画し、それをやり、あとで反省するという習慣をつけることが、必要じゃないかと思うんですね。

それから地域社会では施設が少ないわけですが、その施設は、年に何回かの大会のための施設じゃなしに、毎日使えるような施設が必要ではないか、小さくて金のかからないものを、たくさんつくることが大切だし、その施設には必ずといっていいくらいに、指導者が常駐していることが必要じゃないか。

日本の場合、大会用の施設はつくるけれども、そこには指導者がいない。うるさい管理人だけおる。こういうことじゃなくて、技術指導をするような指導者が必要なのだ。それと同時に、集まる者に、すぐグループづくりをさせる。だから施設と指導者と組織というものが、ほんとうに三位

一体になって、別の表現をすれば Guide・Ground・Group の 3 G 運動として、それぞれの地域でやらせるような行政指導が必要ではないか。とくにそういうことを強調したいのです。

小野 私は、いま小川先生が家族ぐるみとおっしゃいましたけれども、家の中のリーダーシップというのは、ご主人より奥さまのほうが強いんですね。ですから、奥さまたちに対するアピールを、うんとなすったらどうかと思うことと、それから習慣とおっしゃいましたけれども、日々の生活のテンポのなかに、朝起きて、歯を磨いて、顔を洗って、ごはんを食べて、それでレクリエーションの時間をもつというふうに、リズム的にレクリエーションを組み入れていく。

それと、アピールと同時に、こういうふうにしてやればいい、という方法の具体的な紹介ですね。それをできるだけ分かり易く、考えなくてもいいような具合にしながら、いちばんリーダーシップをもっている主婦に対して、理解力を強めていくことが、いちばん早道で、しかもいちばん大事じゃないかと思います。

前川 小野さんがおやりになっているようなクラブを、ぜひ育てたいですね。

小川 いま産経学園というのが、これは主として有閑マダムを対象としているようなところがありますけれども、東京都内で大はやりなんでしょう。ああいうふうに、趣味と実益を兼ね、自分の健康を保持できるようなクラブがたくさんできれば、われわれの生活も、非常に楽しみがふえてくるんじゃないかと思うんです。東京をはじめ全国どの都市にも、そういうのが少ないから、ぜひ実現するようなふんいきが必要だと思いますね。

日笠 たいへん有益ないいご意見を、たくさんいただきましてありがとうございます。私どもの研究所の目的としている、コミュニティということも、協同意識といいますか、お互いに一緒だという意識を、盛りたてていくことが、何よりも大事なわけでございます。

さきほどご指摘がございましたように、そのためには家族ぐるみで、あるいはグループをつくることによって、地域社会にスポーツをはじめ、レクリエーションの基盤を育てていくことがきわめて有効ではないだろうか。

それから、さきほど小野さんから、生活のテンポのなかに、レクリエーションを組み入れていくというご意見がございましたが、自分の生活の中に楽しみを見出すということがあって、はじめて、人と楽しみを共にしようという発展が、期待されるわけでございます。確かにいいコミュニティを育てていくには、レクリエーションがはたす役割が非常に大きいんじゃないかということを、きょうのお話を通じて、強く感じたわけでございます。

お忙しいなかを長時間にわたりまして、たいへんありがとうございます。厚くお礼を申し上げます。

主 要 参 考 書

- | | | |
|----------------------------------|-----------------------|-------------|
| G. D. バトラー | レクリエーション総説 | ベースボールマガジン社 |
| 三隅 達郎 訳 | | 同 上 |
| 江橋 慎四郎 編 | レクリエーション概論 | 同 上 |
| 山崎 進 編 | レジャー時代 | 東洋経済新報社 |
| 南 博 | 日本人の娯楽 | 河出書房 |
| 日高 六郎 監修 | マス・レジャー | 紀伊国屋書店 |
| 日本レクリエーション協会 | 楽しいゲーム | 体育の科学社 |
| 同 上 | 現代社会とレクリエーション | ベースボールマガジン社 |
| 西田 泰介 編 | 地域社会とレクリエーション | 同 上 |
| 現代レクリエーション講座
(日本レクリエーション協会推薦) | | 同 上 |
| 第1巻 | レクリエーション概論 | |
| 「2」 | レクリエーション指導 | |
| 「3」 | 地域社会とレクリエーション | |
| 「4」 | 職場とレクリエーション | |
| 日本レクリエーション協会 編 | 現代社会とレクリエーション | 同 上 |
| 栗本 義彦 編著 | 体力づくりへの道
(資料中心のもの) | 第一法規出版KK |

コミュニティ刊行のおしらせ

既刊

- 第1号 コミュニティのありかた
 - 第2号 新しい農村生活
 - 第3号 婦人と地域社会
 - 第4号 都市生活とコミュニティ意識
 - 第5号 家庭のしつけとコミュニティ
 - 第6号 老人問題とコミュニティ
 - 第7号 コミュニティと青少年
 - 第8号 日本人のつきあい
 - 第9号 家族と親族
 - 第10号 健全な子どもの育成
 - 第11号 今日の教育を考える
 - 第12号 レクリエーションとスポーツ (新刊)
- 続刊予定 健康なまち
-

表紙のブックマークCSFは当地域社会研究所の英語名
The Community Study Foundation の頭文字をとった略
称です

編 集 委 員

〔五十音順〕

青 井 和 夫
白 石 清
並 木 正 吉
日 笠 端
宮 坂 忠 夫

地域社会刊行物 No. 12

コミュニティ 12——レクリエーションとスポーツ

昭和 42 年 4 月 10 日発行

定価 100円 **改訂頒価各号300円**

編 集 財団法人 地 域 社 会 研 究 所
東京都千代田区有楽町1の9
第一生命館
電話 (216) 1211 (大代表)

発 行 株式会社 国 勢 社
東京都品川区五反田3の75
五反田第一生命ビル
電話 (492) 5878
振替 東京 376

印 刷 大日本印刷株式会社榎町工場

地域社会研究所について

この財団法人は、近代のかつ民主的な地域社会（コミュニティ）の発展に寄与する目的で、第一生命保険相互会社が剰余金の一部をさいて基金を提供して、昭和38年10月10日に設立されました。

その事業としては、

1. 近代的市民意識で裏づけられた地域社会観念の確立についての調査研究
2. 近代的地域社会観念の啓発と普及
3. 近代的地域社会を形成する各分野の調査研究
4. 前記の諸事業についての実験と指導
5. 地域社会についての書籍、パンフレットの刊行

などを行ないます。

これらは、いずれも人間生活の全般にわたる大きな問題で、たいへんむずかしい課題でありますので、研究所の組織は、広く各分野にわたる権威者の方々をもって構成されております。

今後、事業の成果により、わが国の地域社会における産業、文化、教育、福祉厚生、建設、自治などの面の諸問題がしだいに解明され、いささかなりとも、新しい日本の社会の実現と発展に役立つことを念願する次第であります。

なお、この研究所の顧問ならびに役員は、つぎのとおりであります。

顧問 (五十音順・敬称略)

- | | |
|------|------------|
| 石坂泰三 | 経団連会長 |
| 内田祥三 | 工学博士・学士院会員 |
| 東畑精一 | 農学博士・学士院会員 |

理事長

矢野 一郎 第一生命会長

常務理事

白石 清 第一生命庶務部長

理事

磯村 英一 文学博士・東洋大学教授

氏家 寿子 日本女子大学名誉教授

緒方 信一 日本育英会理事長

高山 英華 工学博士・東京大学教授

時実 利彦 医学博士・東京大学教授・東京大学脳研究所長

並木 正吉 農林省農業総合研究所雇用研究室長

福武 直 文学博士・東京大学教授

矢田 恒久 第一生命社長

山口 正義 医学博士・結核予防会理事長

監事

酒井杏之助 東京商工会議所副会頭

村上 兼次 第一生命専務取締役

評議員

青井 和夫 東京大学助教授

東 俊郎 医学博士・順天堂大学教授

岡部 良雄 第一生命常務取締役

斎藤 潔 医学博士・国立公衆衛生院顧問

田辺 定義 東京市政調査会副会長

内藤寿七郎 医学博士・愛育研究所副所長・愛育病院長

中山 誠記 農林省農業総合研究所所得研究室長

浜口吉兵衛 第一生命取締役

日笠 端 工学博士・東京大学教授

藤田 たき 津田塾大学長

松方 三郎 共同通信社顧問

宮坂 忠夫 国立公衆衛生院衛生教育室長

村岡 花子 日本ユネスコ協会連盟副会長

(このほかに、理事、監事全員)

